にちぎん

2023 NO.74 夏

インタビュー　扉を開く

別所哲也 俳優・ショートショートフィルムフェスティバル&アジア主宰

俳優とショートフィルムの「二足のわらじ」

地域の底力

香川県三豊市

自立した民間の活動と行政の支援姿勢が導く香川県三豊市の未来

対談　守・破・創

田嶋幸三 日本サッカー協会（JFA）会長

高田 創 日本銀行政策委員会 審議委員

サッカーは世界の縮図　グローバル化が景色を変える

エッセイ　“おかね”を語る

伊沢拓司 クイズプレーヤー **「愛よりお金」なときもある**

にちぎん

SUMMER 2023　NO.74

CONTENTS

2　エッセイ／“おかね”を語る
「愛よりお金」なときもある　クイズプレーヤー 伊沢拓司

4　インタビュー／扉を開く
別所哲也　俳優・ショートショートフィルムフェスティバル&アジア主宰
俳優とショートフィルムの「二足のわらじ」

9　地域の底力――香川県三豊市
自立した民間の活動と行政の支援姿勢が導く香川県三豊市の未来

17　対談／守・破・創
田嶋幸三　日本サッカー協会（JFA）会長
高田 創　日本銀行政策委員会 審議委員
サッカーは世界の縮図　グローバル化が景色を変える

22　日本銀行のレポートから（1）
「経済・物価情勢の展望」（展望レポート）―2023年4月―

24　FOCUS → BOJ 44　日本銀行旧小樽支店金融資料館
開館20年を迎えて

29　日本銀行のレポートから（2）
「金融システムレポート」―2023年4月―

35　トピックス
日本銀行新総裁、新副総裁就任 ほか

39　AIR MAIL from Frankfurt
欧州統合の象徴「ユーロ」

※取材は感染対策を徹底して実施しています。
本誌は6月6日（火）までの情報をもとに掲載しています。

表紙のことば

表紙の店舗は、日本銀行門司（もじ）事務所です。門司事務所は、明治二十六年（一八九三）十月に開設された「西部（さいぶ）支店」の系譜を継ぐ、現在の「北九州支店」の前身です。

西部支店は大正六年（一九一七）、熊本支店の設置と共に「門司支店」と改称しました。

この門司支店の店舗は、昭和二十年（一九四五）の空襲により、金庫・公文庫を残して本館は全焼しましたが、焼失の翌日には市中の銀行内に仮店舗を設け、営業を続けました。

仮店舗での営業は四年五カ月に及びましたが、その期中である昭和二十三年（一九四八）、門司支店は「門司事務所」に改組されます。九州北部地域の経済規模等を考慮して、事実上支店とほぼ同格の権限を持つ事務所でした。表紙の店舗が落成したのは、昭和二十四年（一九四九）のことです。

その後、昭和三十八年（一九六三）に百万都市「北九州市」の発足を機に、門司事務所は「北九州支店」となり、翌年（一九六四）に店舗を小倉（こくら）区（現在の小倉北区）に新築・移転して、北九州の街とともに歩んでおります。

裏表紙の写真は、金融研究所アーカイブ所蔵のものです。

表紙・画 北村公司

扉を開く INTERVIEW

俳優・ショートショートフィルムフェスティバル&アジア主宰

別所哲也

BESSHO Tetsuya

映画、テレビドラマ、舞台、CM、ラジオ、バラエティーと幅広く活躍している俳優の別所哲也さん。表現者としてのそうした活動の一方で、ショートフィルム関連の事業を手掛ける起業家の一面も持つ。二四年前に手探りで始めたショートフィルムの映画祭は、今ではアカデミー賞公認・アジア最大級の規模にまでなった。俳優業とショートフィルム事業の両者で第一線を走り続ける裏にはどんな思いや苦労があったのか。その出会いから語っていただいた。

取材・文 谷 隆一
写真 野瀬勝一

俳優とショートフィルムの「二足のわらじ」

「英語の勉強」から俳優の道に

――テレビや舞台で拝見し、多才な方だなという印象があるのですが、まずは俳優という仕事を選んだ経緯を教えてください。

別所　慶應義塾大学法学部に進学し、ＥＳＳ（英会話クラブ）のドラマセクションに入会したのが始まりです。体を動かし、生きた英語で表現する世界に興味を持ち、四年間、英語劇に携わりました。ですから最初は英語を学ぶための演劇だったのですが、次第に脚本を通して見えてくる海外のカルチャーや政治問題に興味が湧き、何よりも人を体現して見せるということに面白さを感じるようになりました。それで、俳優を志したわけです。

――ご両親は賛成されたのでしょうか。

別所　最初に「俳優になりたい」と告げたときはまともに受け止めてもらえませんでしたね。「サークルでの経験程度でなれるわけがない」という感じでした。

――でも、反対されることはなかったということでしょうか。

別所　そうなんですよね。やらないで後悔するよりいろいろな経験をしたほうがいい、という考え方の両親だったので、ありがたかったですね。

――俳優になって早々にハリウッドでデビューされていますが、そのきっかけを与えてくれたのはお父さまだったそうですね。

別所　ええ。日米合作映画（注1）に向けた英語でのオーディションを父が見つけてきて、「これからは国際社会なのだからチャレンジしたらどうだ」と背中を押してくれました。

――俳優を目指すだけでも難しいのに、さらにハードルを上げた印象を受けます。

別所　もともと大学で英語や法律を勉強したのは、世界の人たちや国々とつながる仕事をしたかったからです。ですから、もし父親に勧められていなくても、いずれはアメリカやヨーロッパに行っていた気がします。

――オーディションに合格し、ハリウッドに行ったのが初めての海外渡航だったそうですね。滑り出しは順調でしたか。

別所　いいえ、全然。自信のあった英語がまったく通用しませんでした。

　そのうえ、分厚い契約書を自分で読んでサインしないといけないし、車の免許も自分で取得しなければならない。全部ゼロからなので、ストレスもあり、かなり苦労しました。

　ただ、当時暮らしたロサンゼルスは青空が広がる陽気な所なので、サンタモニカのビーチにいながら「まあ、明日は何とかなるかな」という前向きな気分にはなれましたね。

　とはいえ、撮影日までにせりふを覚えて演技をすることとか、世界中から集まってくる俳優たちと接点を持つことは、やはり緊張感を伴うものでしたけどね。

――最初の映画出演の後も、アメリカでキャリアを積み上げていくお考えだったのですか。

別所　そういう選択肢もあったのですが、向こうで求められる日本人像と僕自身のやりたいこととにギャップがありました。空手や剣道ができるかと聞かれたり、「身長が高くて日本人に見えないね」と言われたり……。

　アイデンティティークライシ

（注1）作品名は「クライシス２０５０」。一九九〇年公開のＳＦ映画。別所氏は、太陽の膨張から地球を守るために宇宙に向かう宇宙飛行士役を演じた。

スというと大げさですが、ちょっと悩んだ時期がありました。そのときに、現地で通っていた演技学校の先生から「一度日本に帰って、俳優の仕事をして、あなた自身が伝えたい人間像を確立したらどう?」とアドバイスされ、帰国を決断しました。

――日本では二〇代からたくさんのドラマに出ていらっしゃいましたよね。ご著書を拝読すると、三〇代になって一度立ち止まった時期があったそうですが……。

別所　たぶん皆さん同じだと思うのですが、三〇歳前後って、新人の頃のような新鮮さもなく、かといってベテランのような確固たるものがあるわけでもない。何か理由のない不安感に襲われる時期のような気がします。僕の場合は、自分の中の引き出しからいろいろなものを出していたのですが、それが枯渇していくような感じになりました。

あるときインタビューで「仕事以外で興味のあることは何ですか」と聞かれて、はっとしたのです。何もなくて。

それで仕事を休ませてもらって、原点回帰の意味もあって、またアメリカに行きました。

ジョージ・ルーカスに紹介もなくメールを送りつけた

――そこでショートフィルムと出会ったのですね。

別所　はい。若手の監督たちが作るショートフィルムの上映会に誘われました。

「どうせつまらないだろう」という先入観があったので、見たときの衝撃は大きかったですね。たった五分でも感動できるし、大げさに言うと、映画の宇宙があると思いました。上映会の後、何かに取りつかれたように、参加していた監督や仲間と語り明かしたのを覚えています。

――それをきっかけにして、日本でショートフィルムの映画祭を立ち上げられたのですよね。感動されたのはわかりましたが、少し飛躍がありませんか。

別所　これには三つ理由があります。一つ目は、自分が体感したものを他の人たちと分かち合いたいと思ったこと。いくら言葉で感動を伝えても、共感を得られなかったものですから。

もう一つは、その翌年にロバート・レッドフォード（注2）が主宰するサンダンス映画祭に出かけ、「映画祭って本当にいいな」と思ったことです。

そして三つ目は、同じ時期の一九九八年のアカデミー賞で、日系アメリカ人のクリス・タシマさんの監督作品「ビザと美徳」が短編実写映画賞を受賞したことです。第二次世界大戦時に六〇〇〇人ものユダヤ人を救ったリトアニア大使の杉原千畝（ちうね）さんを題材にした作品でした。僕はNHKの司会役でその会場にいたので、日系人が日本人をテーマにショートフィルムを撮ってオスカー像を握ったことに、何か運命的なものを感じましたね。

それで動きだして、今日に至ります。

――しかし、俳優を続けながら映画祭を主宰していくのは、ご苦労が多いのではないですか。

別所　よく「二足のわらじ」とか言われるのですが、自分が楽しくてやっていることですし、俳優業と映画祭に線引きしたことはないですね。エンターテインメントという根っこは同じだと思っています。

もちろん、苦労はあります。華やかなレッドカーペットなんて見えている世界の二%ぐらいで、九八%は契約書の作成やら交渉やらの地道な作業です。特に最初の頃は仲間三人でやっていたので、毎日のようにファミリーレストランで書類作成をし、

1999年、アメリカ大使館にて
ジョージ・ルーカス監督と共に撮影

べっしょ・てつや● 1965年生まれ。静岡県出身。慶應義塾大学法学部卒。87年、舞台で俳優デビュー。90年、ハリウッドデビュー。米国映画俳優組合（SAG）会員となる。帰国後、数多くの映画、ドラマ、舞台、CM、報道番組等に出演。99年、日本発の国際短編映画祭を主宰、「ショートショートフィルムフェスティバル」として現在まで続く。2006年、ショートフィルム関連の事業を行う（株）ビジュアルボイスを設立、代表取締役就任。08年、横浜みなとみらいにショートフィルム専門の映画館を開館し、18年にオンラインに移行。受賞歴に、文化庁長官表彰、岩谷時子賞奨励賞、横浜文化賞など。観光庁「VISIT JAPAN大使」、映画倫理委員会委員、外務省「ジャパン・ハウス」有識者諮問会議メンバーなどを歴任。2012年には、「内閣府・世界で活躍し『日本』を発信する日本人の一人」に選出されている。著書に『夢をカタチにする仕事力―映画祭で学んだプロジェクトマネジメント』（光文社新書）がある。

国際電話をかけていました。隔月ペースでアメリカにも行っていましたね。一泊二日などで。

――二つを並行することについて、ご著書では「楕円思考」と書かれていますね。

別所 軸が二つあると、幾何学的には安定的なオーバル（楕円のような曲線）になりますよね。僕の場合は、俳優業と映画祭の二つの軸があって、大きな弧を描けています。

二つの視点を持つことは大事だと思っていて、俳優の仕事でも、演じながら自分を俯瞰している部分がありますね。

――映画祭立ち上げの過程では、幸運もあったようですが。

別所 ジョージ・ルーカス監督（注3）が学生時代に撮ったショートフィルムをお借りできたというのがありますね。自分でもよくそんなことをしたなと思うのですが、あのときは紹介者もいないまま、英語で直接メールを送りました。あなたの作品を日本で紹介したい、それは僕にしかできないことで、このチャンスを逃したら二度とあなたのショートフィルムが日本で紹介されることはないかもしれない……というような内容でした。おかしな日本人だと思われたでしょうね。

――熱意が通じたのですね。

別所 ビギナーズラックですよ。でも、情熱が人を動かすというのは確かに実感しました。あと、映画祭のパンフレットでそのジョージ・ルーカス監督のつづりを間違えるなど、今だから笑えるようなトラブルも舞台裏では色々あったんですよ。

――先頭に立って映画祭を育ててこられたわけですが、目指しておられるリーダー像などおありですか。

別所 自分ファーストではなく、お客様のためにと考えられることが大事でしょうね。エンターテインメントの仕事は特にそうですが、お客様がいなければ何も生まれませんから。

それと、仲間を大切にすることだと思います。僕が大事にしてきた言葉に「早く行きたければ一人で行きなさい、より遠くに行きたければみんなで行きなさい」（注4）というのがあるのですが、継続していくうえでも、仲間と助け合うことが重要だと思います。

（注2）アメリカの俳優、映画監督、映画プロデューサー。出演した代表作に「明日に向かって撃て！」「スティング」など。監督作品に「普通の人々」など。一九七八年からユタ州で長・短編映画を上映する「サンダンス映画祭」を主宰している。なお、「サンダンス」の名称は「明日に向かって撃て！」で演じた役のサンダンス・キッドに由来している。

（注3）アメリカの映画監督、映画プロデューサー、脚本家。「スター・ウォーズ」シリーズや「インディ・ジョーンズ」シリーズ、「アメリカン・グラフィティ」などで知られる。

（注4）アフリカのことわざ。岸田文雄首相が最初の所信表明演説で引用したことでも知られる。

エンターテインメントが世界を広げてくれる

――ところで、俳優業、映画祭において新型コロナウイルスの影響は深刻だったのではないですか。

別所 コロナ禍はいろいろな気付きというか、新たな世界を生み出したのではないかと思っています。もともと僕らが歩まなければいけなかったテレワークとかキャッシュレスなどの未来

「ショートショート フィルムフェスティバル＆アジア」ロゴ。映画祭は2023年に25周年を迎え、都内複数会場で6月6日～26日まで開催された（オンライン会場は4月27日～7月10日まで）。https://shortshorts.org

ショートショート フィルムフェスティバル＆アジア2022 アワード セレモニーの様子

を、「コロナ」が強引に連れてきたという印象を持っています。

僕たちのエンターテインメントの世界も、公演中止や、人と人との分断を体験しましたが、そのことによって改めて、人間はただ食べて寝て死ぬという存在ではないことを思い知らされました。泣いたり笑ったり憧れたりする体験がどんなにかけがえのないことかを見直させられたように思います。

――未来という点では、ショートフィルムのオンライン配信にいち早く取り組まれていました。

別所　二〇〇八年から一〇年ほど横浜みなとみらいにショートフィルム専用の映画館を常設していたのですが、一八年にオンライン化に切り替えました（注5）。当時は「まだ早い」という反対意見が多かったですけどね。

――俳優業、映画祭のそれぞれで、今後は何を目指していかれるのですか。

別所　AIや新しい道具がどんどん出てくるなか、これからの人間の面白さや危うさを見せるときに、俳優やメディアにできることはもっとあるような気がしています。年を重ね、いろいろな体験をしてきた自分だからこそ表現できることもあると思っています。

同時に、これは年を重ねた動物の本能なのかもしれませんが、俳優業、映画祭のいずれでも、次世代の人たちとどうつながり、どうたすきを渡していけるかを考えるようになりました。

――映画祭やショートフィルムに関しては、今後の可能性をどう感じていますか。

別所　ショートフィルムは時代を映す燃費のいい映像情報ですから、人の心とつながりながら、例えば知的財産として金融商品化されるなど、大きな変化を遂げるのではないかとみています。

――ビジネスとしてどうマネタイズするかという話は、特に文化や芸術の分野では好まれないのかもしれませんが、大事なところですよね。

別所　おっしゃる通りです。エンターテインメントもちゃんとそこに根付いています。

まずは、数値化して客観視できるようにすることが大事です。例えば、この映画祭は何億円のバリューがあり、何千人の集客がある、というようなことですね。その大小が問題なのではなく、ちゃんとインデックスを付けることが大事だと思います。

――後進へのメッセージを頂けますか。

別所　好きな作品には何度でも触れること。同時に、関心のないものに嫌でも触れていくことですね。僕自身、その結果としてショートフィルムに出会っていますから。

ネットのレコメンド機能（注6）などで知らず知らずのうちに世界が狭くなりがちな環境だからこそ、その枠を飛び越える力が必要です。その点では、ショートフィルムは本当にいいですよ。短い間に自分の考えてもいないような世界に連れて行ってくれる奇想天外さがあります。心の中にあるだんだん凝り固まっていく世界をエンターテインメントがほぐしてくれるときがあるのです。

――今日は楽しいお話をありがとうございました。

（注5）常設の映画館は、二〇〇八年二月に「ブリリア ショートショートシアター」の名称で横浜みなとみらいに開館。一七年末に閉館し、一八年二月にオンラインシアター「ブリリア ショートショートシアター オンライン」に移行した（https://sst-online.jp）。

（注6）ウェブサイトへのアクセス履歴等を情報取集し、その利用者と類似する関心を持つ他の利用者を関連づけ、グループ化し、類似した利用者がよく見ているが、その利用者はまだ見ていない商品を表示させる仕組み。

（聞き手／情報サービス局長（取材当時）上口洋司）

自立した民間の活動と行政の支援姿勢が導く香川県三豊（みとよ）市の未来

官民がそれぞれ独自にあらたな流れを生み、スピーディーに進化し続ける香川県三豊市。人の心をつなげるさまざまなコミュニティーが、先駆的なその活動の礎となる。

取材・文 山内史子
写真 野瀬勝一

香川県三豊市西部、瀬戸内海に面した仁尾町の「父母ヶ浜」は約1kmにわたり続く砂浜。砂地の潮だまりに景色や人がくっきりと映る写真がSNSで大きな注目を集めたことがきっかけになり、現在は多くの観光客が訪れる。

一枚の写真が大きく変えた三豊市の人の流れ

香川県西部に位置する三豊市は、旧三豊郡の七つの町だった高瀬町、山本町、三野町、豊中町、詫間町、仁尾町、財田町の合併により二〇〇六年に誕生した。現在の人口は約六万人を数える。

「合併で何かが大きく変わったわけではなく、住民の皆さんにとっては『行政区域が郡から市になっただけ』という感覚だったと思います。一方で自分の中には長年、『この地域には飛躍できる要素があるのになぜ種をまかないのか』という疑問がありました」

そう語るのは、二〇一七年から市長を務める山下昭史氏。高松市に本社がある地方放送局報道部で勤務の後、県議会議員を約六年間務めた経歴を持つ。

そんな三豊市に大きな変化をもたらしたのは西部、瀬戸内海に面した父母ヶ浜だった。

「市の観光交流局の職員が着目した写真は、潮だまりが鏡のように人や背景を映しているもので、SNSに投稿したところ、南米ボリビアのウユニ塩湖のようだと話題になりました。その結果、かつては年間五〇〇〇人程度だった父母ヶ浜への来訪者が二〇一七年ごろから増えだし、現在は年間約五〇万人の観光客で賑わっています」

その賑わいだけに頼ることなく、山下氏は就任以降、種をまき続けている。その一つが二〇一九年に立ち上げた、東京大学大学院教授・松尾豊氏（注1）のサテライト研究室「MAiZM」。AI研究の第一人者として広く知られる松尾氏は香川県出身で、山下氏とは高校の同窓生だったという縁がある。

「全体を俯瞰して物事を進めつつ、マイノリティーにもきちんと向き合うのが行政の役割。例えば教育においても、先端を行くAI教育だけではなく他の選択肢も設けたい」と話す市長の山下昭史氏。2022年、三豊市では義務教育を終えられなかった市民のために香川県初の公立夜間中学を開設した。

三豊市高瀬町で栽培されている高瀬茶の生産発祥の地。その生産量は香川県の八割を占める。

「MAiZMの大きな柱は、高等専門学校を中心としたAIの人材育成です。通信や電子、情報系に関する技術や知識を学ぶ高専の学生たちが即戦力であることに着目しました。実際に、高専の学生によるベンチャー企業が三社起業しています」

その裾野を広げるために小学校でもプログラミング教室が行われているほか、中小企業や地域の課題についてAIを活用して分析し、解決策を探る取り組みが進められている。

「地域の課題解決は、新規ビジネスにつながる可能性が高い。共にあたらしい仕組みを考えましょうというスタンスで、民間企業約

（注1）松尾氏については、広報誌「にちぎん」2021年春号「インタビュー」に記事を掲載しております。

潮だまりの水面が鏡のように周囲を映し出す父母ヶ浜は、とりわけ夕刻に多くの人で賑わい、周辺にはカフェやお土産店などが軒を連ねる。1990年代、父母ヶ浜は汚染が問題になり埋め立ての計画が進められていたが、ボランティア団体「ちちぶの会」の清掃活動により美しい浜がよみがえった。

三〇社と連携しています。企業にとっては新機軸のサービスや商品が生まれる機会になり、三豊市にとってはその果実をもらえるという利点がある。実際、企業との連携によるAIの分析をもとに、デイサービスの送迎の効率化等を実現しました」

MAiZMに関する活動のほかにも、STEAM教育（注2）や市庁舎内のDXを推進するなど、デジタル化に積極的な三豊市だが、その一方で山下氏は職員とのコミュニケーションにも時間を割く。

「新規プロジェクトなど、現場の担当者を含めた小規模なミーティングを頻繁に行っています。情報が日々更新されるマスメディアの世界にいた自分にとって、行政の慣例は驚くことが多く、やり方を改めてもらったものもあります。例えば会議ごとの資料作成の軽減とペーパーレス化を進めたり、プロジェクトの推進のために全庁的なタスクフォースを立ち上げたりと、スピード感や柔軟性を持った意識の共有を図っています」

活発な動きは行政だけではなく民間にも見られ、それが移住者の増加にもつながっている。

「移住者と元からの地域住民が非常にうまく融合しているのが、今の三豊市の大きな特徴です。互いに徹底的に話し合った上で動き、自走しているので、余計なことをしないのが行政の方針。補助金でのサポートではなく、規制緩和のような政策で後押ししています」

暮らしに楽しみをもたらすコミュニティーづくり

山下氏が話す自走者のひとりが、仁尾町で生まれ育った今川宗一郎氏。長年地域で親しまれてきた「ショッピングストア 今川」の三代目を担う。

「二〇代後半が転機でした。かつて私は、スーパーマーケットは地域の暮らしを支えていると思っていました。しかし、そうではなく、逆に地域に支えられてきたからこそ営みを続けられていることに気付き、恩返しを考え始めたんです」

二〇一五年、今川氏はその第一歩として、廃業する事業者の後を継ぐ形で離島への移動販売を手掛けるようになった。

「離島に住む高齢者の方たちは自分の目で見て物を買いたいし、買い物の場はコミュニティーにも

「コロナ禍で活動が制限された期間は、地元の仲間と集まる機会が増え、より深い信頼関係が築けました」と話す今川宗一郎氏。宗一郎珈琲のスタンドは、今川氏の似顔絵が目を引く。

ゴミを増やさないことに配慮した、宗一郎珈琲のステンレス製のカップは全五色。赤なら「もっときれいな浜になってほしい」、黒なら「夜を楽しむ場所が欲しい」など、色の選択により三豊市への要望を伝えられる仕組みになっており、注文の際には会話が弾む効果も生まれる。

（注2）STEAM／Science（科学）、Technology（技術）、Engineering（工学・ものづくり）、Art（芸術・リベラルアーツ）、Mathematics（数学）の頭文字。教科横断的な学習により実社会での問題発見・解決を目指す教育方法。

仁尾町には３軒のスーパーマーケットがあったが、現在は1957年創業の「ショッピングストア今川」だけが残る。

なっている。その役割の重さを実感しているので、八年間休まずに続けています」

二〇一九年、父母ヶ浜を見渡せる場所にコミュニケーションコーヒースタンド「宗一郎珈琲」をオープンしたのも、人のつながりを生む場をつくりたい、という思いからだ。店の傍らでは夕刻、たき火がたかれる。

「数多くの観光客が、父母ヶ浜を見ただけで帰ってしまうのはもったいない。たき火を前に、地元の人との交流も楽しんでほしいと思っています」

たき火は地域の活性化に力を注ぐ仲間が集う場にもなっている。ただ、こうした活動が一元的に進められているわけではないという点で、三豊市の活動は独特だと今川氏は語る。

「三豊市には中心となる駅がなく、駅前の賑わいという概念もない。僕らの活動にも中心人物は存在せず、組織的なものでもありません。それぞれが自分のエリアで動き、必要に応じて連携する。いざという時には、全員がハブになれる。それが僕たちの一番の強みです」

今川氏はかつて賑わっていた商店街で豆腐店やゲストハウス、飲食店を立ち上げ、将来的には商店街の復活も目指している。

「商店街もまた、コミュニティーではないでしょうか。徒歩圏で楽しめ、宿泊者や地元の人たちが交流でき、何かを始めたい人がそれを実現できる場所になってほしいですね。とはいえ、無理をして広げる気はありません。そこに暮らす人が、自分の毎日を楽しむのが一番大事なこと。楽しそうだと思えば人は集まるし、そういう大人を目にすれば子どもたちの人生も変わると思っています」

香川県のうどん文化を宿泊施設で伝える試み

移住者の取り組みでは、うどんを打つ体験ができる豊中町の宿泊施設「UDON HOUSE」が興味深い。経営を担う瀬戸内ワークス株式会社代表取締役の原田佳南子氏は、東京の大手企業で地方自治体の観光事業や地域振興に携わっていたが、二〇一八年、縁があって三豊市に移転。宿の準備段階で重要な役割を担っていた流れから運営にも携わることになった。

「讃岐（さぬき）うどんの文化を宿泊を通して伝えるのが私たちの目的で

築70年を超える古民家を活用したUDON HOUSE。施設内ではうどんや調味料、ロゴ入りのグッズのほか、三豊市の地域商社「瀬戸内うどんカンパニー」が手掛けた、家庭でうどんづくりを体験できる「さぬきうどん英才教育キット」も販売している。

瀬戸内ワークス（株）代表取締役の原田佳南子氏が手にするのは、サブスクリプションサービスとして発送される手打ちうどんとだしがセットになった「うどんのおうち」。休業を余儀なくされた期間もあったコロナ禍に、安定的な事業の柱をとの思いから生まれた。

三豊市をはじめ香川県内では、讃岐うどんは日常に欠かせない存在。かつては家庭でもうどんを打っていたが、その習慣は失われつつあり、うどんの文化を学べる UDON HOUSE を地元の人が利用するケースもあるという。

す。ただ、地元の人にとってうどんは食べるもので、打つのは仕事なので、周囲の理解が得られるまでに時間はかかりました。それでも今ではご近所から職人さんまで多くの方々にご理解いただき、皆さんに守られながら進んでいます」

体験型施設の魅力を広く発信するきっかけになったのは、国内の英字新聞での紹介記事だった。それがアメリカの放送局の取材や、国際的な信頼度を誇るガイドブックへの掲載につながり話題を呼ぶ。コロナ禍で一時は休業を余儀なくされたものの、再び活気が戻ってきている。

農園での収穫体験や、地元のうどん店の食べ歩き等のプログラムと共に印象深かったのは、移住者である原田氏が地域の人を結ぶ橋渡し役になったという話だ。

「私は広く多くの仲間の力を借りていましたが、合併後も七つの町は独自性が強かったせいか、飲み会の席などで、過去のしがらみがない自分が仲介役になっているのに気付き、三豊市でのコミュニティーの必要性を感じました。昔話やうわさ話ではなく、自然と未来を語っていたのですが、結果的にはこうしたコミュニケーションの取り方が、今の三豊の文化になっているような気がします」

地元の若手事業者が連携して 2020 年にオープンした「おむすび座」は、ビュッフェスタイルでおむすびとおかずを並べる飲食店。全席畳敷きで、乳幼児を含めた子ども連れがリラックスできる空間になっている。

原田氏は、地域に携わる人材を増やすことを目指して、二〇二〇年に会員制シェアハウス「瀬戸内ワークレジデンスGATE」を開業。二〇二二年には、地元企業を中心とした一八社が関わる市民大学「暮らしの大学」も開校した。GATEは関係人口(注3)のコミュニティー、大学は地域の学びのコミュニティーとしての役割を担っている。

「今の私たちの活動が本物なのかどうか判断する一つの基準として、『仕事がないために仕方なく離れていった人たちがまちに帰ってくるかどうか』という観点があると思います。実際、わずかながらも若い世代にそういう変化が見られており、あらたな風が吹いている感覚があります」

移住者が担う移住促進と地域の人との橋渡し

南東部の財田町では、IターンとUターンの移住者が連携して、地域の移住促進事業を担う。二〇一九年に誕生した「財TURN(さいターン)＊」だ。

実際にIターンした一人でまちづくり推進隊財田の理事を務める橋本純子氏は、新規就農のため二〇一五年に大阪から財田へと拠点を移し、地元の果樹園「アンファーム」でアボカドやトロピカルフルーツの栽培にいそしむ。

「法人就農は効率的に動ける、新しいことにチャレンジしやすいといった利点があり、私自身はより多くの方におすすめしたいと思っています」と話す、財 TURN ＊の橋本純子氏（左）と、橋本氏が農業に従事するアンファーム代表の安藤数義氏（右）。アボカドやマンゴーはアンファームの主力生産品。

（注３）関係人口／移住した「定住人口」でも観光に来た「交流人口」でもなく、地域と多様に関わる人々のこと。

「何かあったときに誰かに助けてほしいと言える場所やコミュニティーが、財田には残っているように思えます」と話す、財 TURN ＊の石井章弘氏。東京から故郷に戻った後、ペットである羊と共にゆっくりと時間が流れる暮らしを営んでいる。

「社会人向けの農業スクール『AIC（アグリイノベーション大学校）』で学んだ際、財田で研修を受けてご縁が生まれたのがきっかけになりました。AICの卒業生が私を含めて五組移住しているのですが、私たちには休耕地を活用した農業を営みたい方々の誘致やサポートをより積極的に進めたいという思いがあり、それが財TURN＊の設立につながりました。これまでの農業は個人経営が基本でしたが、自分のような法人就農を含めて多様な農業への携わり方があることも伝えていきたいですね」

三豊市では旧七町にそれぞれ、自主的に地域のために活動する「まちづくり推進隊」があり、財TURN＊はNPO法人「まちづくり推進隊財田」に属する形になっている。市からは交付金が出るものの、申請や報告といった煩雑な事務作業は、まちづくり推進隊の事務局が行うことで財TURN＊は活動に専念でき、自由度は高い。

石井章弘氏は、東京での会社勤務を経て故郷に戻り、現在は、一度は耕作放棄した果樹園の再生を行っている。Uターンした一人で推進隊の理事も務めているため、財TURN＊と推進隊を結ぶ役割も担っている。

「財田町はもともと地域活動が活発で、今も定期的なスポーツ大会が行われています。コロナ禍を経て地域のコミュニケーションは薄れているかもしれませんが、推進隊や財TURN＊の活動を介して、人のつながりを守れるのではないかと思っています」

財田町には大型の量販店やアパートのような集合住宅がなく、決して利便性に優れているわけではないが、橋本氏は地域の魅力をこう語る。

「自分にとっては人も景色も素晴らしい場所で、居心地が良い。地元の方はあまり感じていないのかもしれませんが、昔からお遍路さんが行き来するのが日常だったおかげか、よそ者を優しく受け入れる文化があるような気がします」

その言葉に、石井氏は照れたような表情で目を細めた。

「移住先として、強くおすすめするわけではありません。財田町に来てみてはいかがですか？　ぐらいの思いですが、移り住んだ方々が喜んでくださる町で自分が生活しているのは嬉しいことですね」

2013 年に立ち上がった財田の地域自主組織「財田の農業を考える会」では、地域住民と移住者との交流会を定期的に開催してきた。（写真提供：財 TRUN ＊）

三豊市に着任した地域おこし協力隊が任期終了後、古民家を活用して始めた「Café 李（カフェ トキ）」も、集いの場所の一つ。（写真提供：財 TRUN ＊）

財田町の道の駅「たからだの里さいた」には、特産品の販売所や飲食店に加え温泉施設があり、多くの来訪者で賑わいをみせる。

四国霊場八十八ヶ所の第七十番札所となる豊中町の本山寺。四国霊場の中で五重の塔を有するのは、この本山寺を含めた四寺。三豊市内にはほかに三野町の弥谷寺、山本町の大興寺を含めた三寺が札所になっている。

民間事業者の連携が生んだ地域内循環ビジネス

もとからの住民と移住者との融合が実を結んだプロジェクトとしては、二〇二一年に詫間町に開業した宿泊施設「URASHIMA VILLAGE」が最たる存在だ。名称は、宿が立つ荘内半島に残る浦島太郎伝説に由来する。

「運営する瀬戸内ビレッジ株式会社は、前述の今川氏、原田氏のほか交通、建築、家具製造など三豊市内の一一の事業者が株主として名を連ねているだけでなく、それぞれに関係する業務を担っています」と話すのは、代表取締役の古田秘馬氏だ。

「一社では不可能でも、連携により地域内でもこういうプロジェクトができるという、地域内循環ビジネスのモデルになってほしい。コストが抑えられるので利益が出やすい、という利点もあります」

約二〇〇〇坪の敷地に立つ三棟は一棟貸しで、客室からは瀬戸内の美しい景色が望める上、広いビーチを独占できるが、収容数は最大二三名とさほど多くない。

「これからの時代は、不特定多数ではなく特定の方々を狙うべきだというのがわれわれの考え方。目的を持って来てもらう。逆に言えば、目的を持ちたくなるようなものの、ことをいかにして生み出すかが重要だと思っています」

古田氏は、地域や企業のプロデューサーとして全国で数多くの成功事例を手掛けてきたヒットメーカーだ。二〇一六年に三豊市で講演を行ったのがきっかけとなり、現在はこの地にも関わっている。

「市役所の職員も民間企業の方も、世代を超えてフットワークが軽く、先入観を持っていなかったのに感化されました。なにか特化した産業があったわけではなく、ゼロからつくっていける非常に自由な環境も魅力でしたね」

この数年で延べ約七〇のプロジェクトが生まれたと話す古田氏

JR詫間駅に立つ三豊市観光交流局では、レンタルサイクルのサービスに対応。三豊市には坂道が多いことに配慮し、電動アシスト自転車も備えられている。

「三豊市では起業した高専生をはじめ、次の世代も動きだしていますが、必ずしも僕らと同じようなことをやる必要はない。選択肢があり、自分のやりたいことを口に出して挑戦できる自由が重要だと思っています」と語る、瀬戸内ビレッジ(株)代表取締役の古田秘馬氏。

大きく窓が取られ、広々としたつくりでくつろげるURASHIMA VILLAGEの宿泊棟。地域の木材の活用や事業者の連携が地域の活性化をもたらしていることなどが評価され、URASHIMA VILLAGEは2021年度ウッドデザイン賞農林水産大臣賞を受賞した。

粟島には、亡き人への思いをつづった手紙など届け先不明の郵便物を預かる「漂流郵便局」もあり、広く全国から来訪者がある。(写真提供:一般社団法人三豊市観光交流局)

三豊市の有人離島の一つである粟島には、日本初の海員養成学校が1897年に誕生。学校が廃校となった後には「粟島海洋記念館」として施設や船舶機器等が大切に保存されている。(写真提供:一般社団法人三豊市観光交流局)

日本で訪れるべき桜の名所として、アメリカの大手新聞に大きく取り上げられた「紫雲出山」。桜の木々がカビの一種である「てんぐ巣病」の感染に見舞われたものの、伐採や剪定など景観を守るための対策が進められている。
（写真提供：一般社団法人三豊市観光交流局）

は、UDON HOUSEや暮らしの大学の発案など、種火となるさまざまなアイデアを次から次へと繰り出してきた。

各地域で一人ひとりが自助に取り組み、市役所が陰ながら公助で支える中、古田氏が未来に向けて打ち出したのが「ベーシックインフラサービス」という共助の考え方だ。健康、教育など暮らしに関わる幅広いデータを連携させ共有化することで効率化を目指すプロジェクトで、ドイツのシュタットベルケ（インフラ関係の自治体所有の公益企業）の仕組みをもとにした先進的な取り組みだ。

官民それぞれが誇りを持てる地域づくりを目指す

「三豊市として合併した旧七町にはそれぞれの歴史や文化がありますから、無理やりまとめるのではなく、時間をかけて文化的に一つになるのが自然な流れ。今は多極分散型ネットワークというまちづくり方針を掲げ、そのもとでいかに連携していくかを考えています」

そう語る市長の山下氏のもと、三豊市でまかれている種はまだまだ数え切れないほどある。例えば休耕地の活用を兼ねたあらたな特産品として期待されるのが、漢方薬の原料の薬用作物だ。地元の高校を巻き込み、その栽培とAIを結びつける試みも行われている。

三豊市三野町の「津嶋神社」（写真左）は、江戸時代から子どもの守り神として知られる。通常は橋の手前の遥拝所での参拝になるが、1年に1度2日間だけ、本殿がある津島へ渡ることができる「夏季例大祭」の際には約10万人が訪れる。

「三豊市のプレゼンスを上げるのも、僕の仕事の一つ。そのためにはマスメディアも活用しつつ、とにかくわれわれの活動を発信することが大事だと思っています。『三豊市はすごいね』と広く話題になれば、ほかの地域や企業が関心を持ってくれるし、市民の皆さんにはまちを誇りに思うシビックプライド（街に対する市民の誇り）が生まれるでしょう。市役所の若手職員は従来にはない思い切った行動を見せることが多くなりましたが、要望が迅速に対処されれば市民の喜びにつながるし、職員にとっては誇りになる。経済だけではなく住む人がそれぞれに誇りを持てる、そんな循環を目指しています」

三豊市の各所を巡り印象的だったのは、つかず離れずの絶妙な官民の関係と、人のつながりと取り組みの循環を生むコミュニティーの存在だ。ポジティブな意味で「先が読めない」という声も聞いた。三豊市を再訪すれば、たとえ半年先、一年先であっても、龍宮城から帰った浦島太郎のごとく、状況の変化、進化に驚かされるのかもしれない。

周辺を山に囲まれた財田町の景色。「毎日、同じ道を行き来しても、そのたびに山の表情が違って見える。眺めていて飽きません」と、都市部から移住した財 TURN ＊の橋本純子氏はこの地での生活の喜びを語る。

URASHIMA VILLAGE に隣接する詫間町の鴨之越の浜（写真中央）は干潮時に浦島神社がある丸山島 (写真左) に渡ることができる。

対談 守破創

サッカーは世界の縮図 グローバル化が景色を変える

日本サッカー協会（JFA）会長で、国際サッカー連盟（FIFA）のカウンシルメンバーも務める田嶋幸三氏。2022年に開催されたワールドカップ（W杯）カタール大会での日本代表チームの躍進や開幕30周年を迎えたJリーグ発展の背景には、どのようなリーダーシップがあったのか。国際基準で考えることの必要性を、少年時代からサッカーを続けている高田創審議委員と語り合う。

高田 創

日本銀行政策委員会審議委員

TAKATA Hajime

1958年神奈川県生まれ。82年東京大学経済学部卒業、同年、(株)日本興業銀行入行。86年オックスフォード大学開発経済学修士課程修了。99年興銀証券(株)市場営業グループ投資戦略部長、2000年みずほ証券(株)市場営業グループ投資戦略部長、11年みずほ証券(株)執行役員グローバル・リサーチ本部副本部長。みずほ総合研究所(株)常務執行役員、専務執行役員、副理事長エグゼクティブエコノミストを経て、20年岡三証券(株)グローバル・リサーチ・センター理事長エグゼクティブエコノミストに就任。著書に『地銀　構造不況からの脱出―「脱銀行」への道筋』(きんざい)、『個人金融資産2000兆円　山は動くか』(同)、『シナリオ分析―異次元緩和脱出：出口戦略のシミュレーション』(日本経済新聞出版社)など多数。22年7月より日本銀行政策委員会審議委員。

田嶋 幸三

日本サッカー協会（JFA）会長

TASHIMA Kouzou

1957年熊本県生まれ。76年埼玉県浦和市立南高校サッカー部でキャプテンを務め、全国高等学校サッカー選手権で優勝。筑波大学に進学し、日本代表選手に選ばれる。卒業後、古河電気工業(株)に入社、83年から86年まで西ドイツのケルンスポーツ大学に留学。筑波大学大学院修士課程体育研究科修了。筑波大学と立教大学のサッカー部コーチ、筑波大学客員助教授などを経て2001年U-17日本代表監督として世界大会出場。ＪＦＡ技術委員会委員長、ＪＦＡアカデミー福島初代スクールマスターなど歴任。15年から国際サッカー連盟(FIFA)の理事（現・カウンシルメンバー）を務め、現在3期目。16年から現職。19年から21年まで日本オリンピック委員会副会長。著書に『「言語技術」が日本のサッカーを変える』(光文社新書)、『日本サッカー協会会長秘録　批判覚悟のリーダーシップ』(中央公論新社)がある。

写真 野瀬勝一

ドイツ留学時の子どもへの指導で言語技術の必要性を痛感した

高田　田嶋さんには父・勇（注1）ともども長年お世話になっておりまして、今日は対談の機会をいただき、大変光栄に思っています。

田嶋さんは私より一歳上で、小学生の頃からサッカーをなさり、全国高校サッカー選手権では優勝されました。さらに大学時代、日本代表と輝かしい活躍をされましたが、まずはサッカーを始めたきっかけを教えてください。

田嶋　一つは、小学一年生のときの東京オリンピック（五輪）です。サッカーが行われた駒沢運動公園に家が近かったので、見に行きました。

それと、ちょうどその頃、学習指導要領でサッカーが体育の授業の必修科目に指定されました。

そのようなわけで、小学校でサッカーに出合い、五輪で競技としてのサッカーを見ることができ、四年後にはメキシコ五輪での銅メダルに興奮し、小学校で良い指導者に巡り合う――そんなことが重なって、サッカーに夢中になりました。それがずっと今まで続いています。

高田　私も六八年のメキシコ五輪には鮮烈な思いを持っていて、実はその頃にサッカーを始めています。スポーツ少年団という子どもが授業外の時間に集まってスポーツを行う場が急にできまして、何人か集まるとボールをくれたんです。

当時は釜本邦茂さん（注2）や杉山隆一さん（注3）という素晴らしい選手がいらして、日本サッカーリーグも始まった頃でした。メキシコ五輪後にヤンマーディーゼル対三菱重工戦が国立競技場であって見に行ったのですが、観客が四万人以上も入っていましたね。

田嶋　あれだけ盛り上がったのがしぼんでしまったということが、ＪＦＡ会長に就いている今の私にとって教訓になっています。私はその後のお客さんが来ない時期に日本代表として古河電気工業（古河電工）でもプレーしたので、「あの時代にだけは絶対戻りたくない」という思いで今の職務に当たっています。

高田　古河電気工業でプレーされた後、指導者の道をお選びになり、当時の西ドイツにも留学されていますね。

田嶋　少し経緯があります。高校生の頃にさかのぼりますが、当時は高校サッカーが非常に盛んだったのです。私もサッカーの強豪校に行きたいと思い、越境して、浦和南高校に進学しました。そこは、梶原一騎さん原作のサッカー漫画「赤き血のイレブン」のモデルになった高校でもありました。

一方で、竜雷太さんが教師役で主演した学園ドラマ「これが青春だ」などにも影響されて、体育教師になりたいという夢がありました。当時はプロリーグはありませんでしたからね。それで卒業後は筑波大学に進み、高校の教員になろうと思っていました。ところが、大学四年生のときに日本代表に選ばれ、幾つかの実業団チームから声をかけていただいたので、「もう少しやろうかな」と。

古河電工を選んだのは、そこ

（注1）高田勇（一九三一～二〇一二）／フランス文学者。明治大学名誉教授。フランス語教育に関する著書のほか、ロンサールやノストラダムスを中心とした訳書など多数。サッカーを縁に田嶋幸三氏と交流があった。

（注2）釜本邦茂（一九四四～）／元サッカー選手（ヤンマーディーゼルサッカー部所属）、元サッカー指導者。日本サッカーリーグでは歴代一位となる通算得点（二〇二点）とアシスト（七九回）を記録。一九六八年メキシコ五輪で得点王。参議院議員を一期務めた。

（注3）杉山隆一（一九四一～）／元サッカー選手（三菱重工業サッカー部所属）、元サッカー指導者。メキシコ五輪で五アシストするなど日本代表でも活躍した。

からドイツの1.FCケルンに行った奥寺康彦さん（注4）の存在があったからです。「西ドイツに二カ月留学させてあげる」と言われて、興味を持ちました。

高田　すぐに行かせてもらえたのでしょうか。

田嶋　ええ。そこで見た環境には驚かされました。森の中に天然芝のグラウンドが数面あって、クラブハウスはきれいで、その中で科学的な指導を受けて、練習後にはシャワーを浴びて着替えて帰れる。スポーツにこんな爽やかな世界があるのか、とびっくりしました。

　後で知ったのですが、西ドイツは戦後のスポーツ政策をしっかりやり、都市ごとの人口に応じてスポーツ施設の充実化をすすめているとのことでした。

高田　行政の財政支援も伴っているということですね。

田嶋　留学しているときはケルンスポーツ大学の学生寮で生活させていただき、そこから通っていたのですが、すぐに「もっとここ（ドイツ）で勉強したい」という気持ちになりました。

　そんな経験もあって、古河電工での選手生活を経た後、改めて筑波大学大学院に進むことを決断し、合格後にすぐ、ドイツへと再び留学したんです。

高田　日本人では初ですか。

田嶋　すでに二〇人ぐらいサッカーを勉強しに来ていましたね。その中で私は、日本のサッカー界に多大な影響をもたらしたデットマール・クラマーさん（注5）が監督を務めていたバイエル・レバークーゼンに受け入れていただき、プロの練習を毎日見ながら、アマチュアチームでプレーするという生活を一年半くらい続けました。

高田　クラマーさんといえば日本のサッカーの礎を作った方ですが、離日後も日本のサポートをしてくださっていたんですか。

田嶋　そうです。長沼健さん（注6）、岡野俊一郎さん（注7）たちとのパイプが非常に強かったのです。レバークーゼンは私が留学したケルンから近かったので、非常にラッキーでした。

　ですが、私は教員になりたいという目標を捨てきれなかったものですから、ドイツでは指導者になろうと思って二年半ほど学びました。

高田　当時の日本のスポーツ指導は「根性」という感じでしたから、田嶋さんが新しい時代の科学的な指導法を持ち込まれたということでしょうね。中でも、言語技術を大事にされていると聞いています。

田嶋　私はケルンのクラブで一二歳以下の子どもの指導をさせてもらったのですが、今ここに来るまで、その体験が大きく影響しています。

　ドイツには、日本のような上下関係という感覚がありません。皆対等で、子どもですら平然と、指導者である私に「なんでこの練習をするの？」などと聞いてきます。そういう環境のなかで、指導者というのは言葉でしっかり意図を伝え、さらに納得させなければいけないのだな、と学びました。

　プレー中も彼らはとても考えています。「なぜそこに蹴ったの？」と聞くと、必ず彼らなり

（注4）奥寺康彦（一九五二～）／元サッカー選手。現在、一般社団法人横浜FCスポーツクラブ代表理事。古河電気工業サッカー部を経て、西ドイツの1.FCケルン、ヘルタ・ベルリン、ヴェルダー・ブレーメンでプレーし、ブンデスリーガ優勝などの戦績を残した。

（注5）デットマール・クラマー（一九二五～二〇一五）／ドイツ生まれ、元サッカー選手、元サッカー指導者。日本サッカー界初の外国人コーチで「日本サッカーの父」とも称される。

（注6）長沼健（一九三〇～二〇〇八）／元サッカー選手（古河電気工業サッカー部所属）。日本代表監督を務め、メキシコ五輪で銅メダルを獲得。日本サッカー協会会長も務め、日韓W杯招致にも尽力した。

（注7）岡野俊一郎（一九三一～二〇一七）／日本代表監督、日本サッカー協会会長、国際オリンピック委員会委員など歴任。日本代表チームではクラマー氏の通訳も務めた。

の論理で答えてくるのです。常に論理的に考えながらプレーしているから的確に判断できる選手になるわけで、そういうことを日本の指導者たちに伝えたいと思うようになりました。

国際的に活躍するには「察してくれ」では通じない

高田　帰国後は筑波大学、立教大学で指導をされています。そこで実績を上げて、アンダー世代の代表監督になったということでしょうか。

田嶋　アンダー世代の代表監督になる前に、Jリーグで指導者養成を担当した時期があります。

　リーグ発足から二年目ですが、このとき、日本人監督が次々と退任していく事態に直面しました。それで、どうして辞めることになったのかをインタビューして回ったことがあります。その時、多くの監督が口にしたのが、「なぜこの選手を代えたのか」「なぜこの練習をするのか」というジーコなど多くの外国人選手からの質問に答えられず、プレッシャーに耐えられなくなった……というものでした。

高田　やはりコミュニケーション力が重要ということですね。

田嶋　はい。それで、プロチームやプロ選手を指導できるS級ライセンスの取得課程に、ディベートや言語技術習得を取り入れました。

　そうするうちに、自分も現場でやりたくなり、U-17の日本代表監督をさせてもらったんです。

高田　論理的に伝えていく表現力や指導法というのは、勉強で身につけられるものなのでしょうか。

田嶋　言語技術を身につけるには、四六時中論理的に考えることが求められますよね。その点、日本語は不向きかもしれません。省略しても通じますから。

　しかし、「察してくれよ」では国際的には通用しません。プレーにおいても、「ここにボールをくれよ」と言うだけではだめで、「俺は足が速いからここにパスしてくれれば絶対活躍できるよ」とちゃんと伝えることが大事になってきます。

高田　海外では日本と比べて言葉や民族など多様性が大きく、ちゃんと説明するカルチャーがありますね。確かに日本に欠けている部分かもしれません。一方で最近は、海外で活躍する選手が増えています。

田嶋　ヨーロッパで百数十人、ASEANに一〇〇人以上、インドなどでプレーしている選手もいます。そこで活躍するにはその文化に慣れ、言葉もできなければいけませんが、最近はインタビューでも自分の言葉で話している選手が多く、非常に成熟してきているなと感じます。

高田　二〇二二年のカタールW杯を見ていても、日本代表のメンバーのグローバル化を感じました。私はサッカーは世界の縮図だと思っているのですが、人材のグローバル化というのは、これからの日本が目指すべき姿だと思いました。日本代表は日本のグローバル化のモデルケースでもあると思います。

Jリーグ開幕三〇年の節目に思う道のりの正しさとこれから

高田　ところで、二〇二三年五月十五日はJリーグ開幕から三〇周年という大きな節目でした。数々の成果がありますね。

田嶋　Jリーグは一九九一年に地域に密着することと、代表チームが世界で強くなることを目標に掲げて発足しました。発足から二年後にリーグが開幕して三〇年。ただプロリーグをやってW杯に出られたわけではありません。地域にサッカーが浸透して広い裾野を作り、そこから優秀な選手を送り出して世界で勝てるようになることをずっと目指してきたのです。

高田　世界を見回しても、三〇年でこんなに大きなブレークスルーがあった地域や国はないように思います。今後は、さらに一段階上に向かうという感じでしょうか。

田嶋　JFAがミッションステートメントとして出した「JFA二〇〇五年宣言」では、「サッカーを通じて豊かなスポーツ文化を創造し、人々の心身の健全な発達と社会の発展に貢献する」という理念を具現化するために、「日本代表が世界で活躍することで、人々に勇気と希望と感動を与える」というビジョンを示しています。実際、カタールW杯でドイツ、スペインという強豪国を破りベスト一六に進んだとき、日本中が熱狂しました。

　実は二〇五〇年までにW杯で優勝するという約束もしていて、これにはメディアなどから疑問の目が向けられていたのですが、最近は「もっと早めたほうが良いのではないか」とまで言われるようになっています。

高田　目線が高くなったのですね。選手たちが普段から世界基準でやっていることもあり、良い循環ができたということですね。

　私も今、中央銀行の立場として、常に世界の動向を意識しています。金融の動きは世界中が一体になっていますから。そういう点で、共通するものを感じます。

田嶋　常に世界を意識するという意味では、確かにサッカー界では全国津々浦々まで「この子は世界で活躍できるんじゃないか」という視点で指導者は考えてくれています。

高田　やはり、W杯カタール大会で新しい景色が見えたのだと思います。

田嶋　本当にそう思います。日本が最初に出た一九九八年のW杯フランス大会を思い出します。高田さんのお父さまと現地で決勝戦を見て、ホテルに帰ってシャンパンを飲み、外に出たら、パリ中に人があふれていました。懐かしいです。

　あのときのパリのように、あんなふうに日本を熱狂させたいと思います。日本中の人が「W杯に勝った！」と街に繰り出す時が来たら嬉しいですね。

高田　一人のサッカーファンとして期待したいです。と同時に、今後はさらにプレーする人が増えるといいなと思います。実は私もフットサルを月に一度くらい楽しんでいるのですが、昨今はスポーツの習慣化の大切さも叫ばれていますね。

田嶋　JFAの中期計画では、キッズ、女子、シニアのスポーツ促進を重点的に取り組んでいくことを掲げています。例えば、生涯スポーツの一つとして、ウォーキングサッカーを推奨しています。また、未就学児に向けては「目指せクラッキ！」というプログラムをクリアし、各地で行われる対象イベントに参加したキッズにサッカーボールなどが入ったスターターキットをプレゼントしています。

　ほかにも、フットサルやビーチサッカー、障がいのある方々のサッカー団体のサポートなどにも力を入れているところです。

高田　サッカーにはさまざまな人をつなげる力があることを改めて感じます。今日は本当に楽しかったです。ありがとうございました。

日本銀行のレポートから

日本銀行は、1月、4月、7月、10月の政策委員会・金融政策決定会合において、先行きの経済・物価見通しや上振れ・下振れ要因を詳しく点検し、そのもとでの金融政策運営の考え方を整理した「経済・物価情勢の展望」（展望レポート）を決定し、公表しています。また、展望レポートの内容を、より幅広い読者に伝えるための取り組みとして、そのポイントをイラストとともに簡潔に整理した資料（ハイライト）を公表しています。本稿では、2023年4月の展望レポート（基本的見解は4月28日、背景説明を含む全文は5月1日公表）のハイライトをご紹介します。

＊全文は、日本銀行ホームページに掲載されていますので、ご関心のある方は、ぜひそちらもご参照ください。
https://www.boj.or.jp/mopo/outlook/index.htm

「経済・物価情勢の展望」（展望レポート・ハイライト）

2023年4月

日本経済は緩やかに回復していく

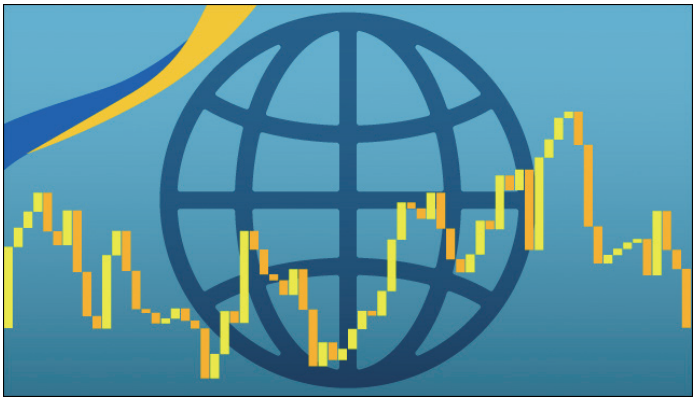
日本経済は、これまでの資源高や海外経済の回復の鈍さにより下押しされますが、消費の増加などに支えられて、緩やかに回復していきます。

物価は減速したあと再び緩やかに上昇していく

消費者物価の前年比は、輸入物価の上昇を起点とする価格転嫁の影響が低下し、今年度半ばにかけて減速します。その後は、経済が改善し、賃金上昇率も高まるもとで、再び緩やかに上昇していきます。

海外の経済・物価動向など不確実性は高く、市場動向に注意

海外の経済・物価動向、ウクライナ情勢の展開や資源価格の動向など日本経済を巡る不確実性はきわめて高い状況です。また、金融・為替市場の動向と日本経済・物価への影響にも十分注意を払う必要があります。



強力な金融緩和を継続する

日本銀行は、内外の経済や金融市場を巡る不確実性がきわめて高い中、経済・物価・金融情勢に応じて機動的に対応しつつ、粘り強く金融緩和を継続していくことで、賃金の上昇を伴う形で、二%の「物価安定の目標」を持続的・安定的に実現することを目指していきます。

政策委員の経済・物価見通し

（注）●は実績値、○は見通しです。

日本銀行旧小樽支店金融資料館

開館二〇年を迎えて

日本銀行旧小樽支店金融資料館は、二〇〇三年五月に日本銀行の広報施設として開館して以来、毎年一〇万人ものお客様にお越しいただき、小樽の人気観光スポットの一つに数えられています。今年、開館二〇周年を迎えた機会を捉えて、資料館の特徴とそれを支える職員の取り組みなどについて、ご紹介します。

金融資料館設立の概要

日本銀行旧小樽支店金融資料館は、日本近代建築の父とされ、東京駅や日本銀行本店本館を手掛けた辰野金吾と、その弟子の長野宇平治らの設計により、一九一二年に完成した日本銀行旧小樽支店当時の建物を活用しています。小樽支店は、小樽の発展と共に歩み、小樽の人たちから「北のウォール街」と呼ばれ、当地金融街の中心として機能しました。その後、二〇〇二年に業務を札幌支店に移管して廃止されました。長年地元に親しまれた建物が小樽で引き続き役立つものとなるよう、日本銀行の広報施設として二〇〇三年に開館したのが、金融資料館です。

金融資料館の魅力

この金融資料館の魅力として、第一に歴史ある建物の内外装をそのまま残していることが挙げられます。建築に三年もの期間が掛けられ、構造や装飾にさまざまな特徴が見られます。

外観は、出入り口周りや腰壁（こしかべ）部分に本店本館と同様に花こう岩が用いられ、屋根には小樽港を眺望する望楼を含め五つのドームが設けられるなど、重厚な印象となっています。また、外壁の表面は、モルタル塗りにより石造り風となっていますが、その構造はレンガ造りとなっており、約二四五万個もの大量のレンガが使用されています。さらに、外壁を飾る一八体のレリーフは、アイヌの守り神であるシマフクロウを模したものとされています。

内部に入ると、一階カウンターには大理石が用いられ、二階まで柱のない吹き抜け構造が目を引きます。この吹き抜け構造は、鉄骨小屋組みといわれる当時の先端技術を用いることで可能

屋根の５つのドームが特徴的な旧小樽支店金融資料館。

となりました。そしてこの鉄骨には官営八幡製鐵所の初期の鋼材が用いられています。屋根裏の鉄骨の構造を直接ご覧いただくことはできませんが、館内建物探訪コーナーでは写真付きパネルで詳しく紹介されています。このほか、旧小樽支店時代に支店長室として使われていた展示室エントランスの天井には、銀行券にも印刷されている日本銀行のマークの装飾が施されるなど細かなつくりを見ることができます。

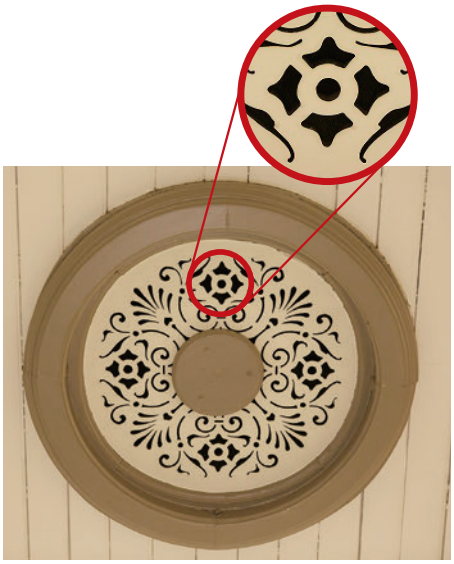
第二の魅力として、展示内容が、小樽の特色を盛り込んだものとなっていることが挙げられます。

展示エリアは、歴史関係と業務関係の二つに分かれており、このうち歴史展示ゾーンでは、明治時代以降の小樽の経済発展の流れと街並みの様子、そしてそれと共に歩んだ旧小樽支店の歴史がパネルやジオラマなどによって紹介されています。現在は落ち着いたたたずまいを見せる小樽の街が、かつて、輸出額で道内一位を誇り、また銀行店舗数で函館や札幌をも上回るなど、

アイヌの守り神であるシマフクロウを模したとされるレリーフ。

旧小樽支店の窓口として使用していたカウンターには、岐阜県赤坂産の大理石が使用されている。

当時の先端技術を用いることにより実現した柱のない吹き抜けの空間。2階部分の回廊からは1階の業務エリアを見渡すことができる。



館内各所に日本銀行のロゴマークが装飾として施されている（赤枠内）。

左：旧小樽支店時代の支店長室の天井飾り。
中央：正面玄関の扉。
右：階段手すりの支柱。

かつての銀行街を再現したジオラマ展示。

旧小樽支店で使用されていた金庫は現在展示スペースとして利用されており、中へ入ることができる。

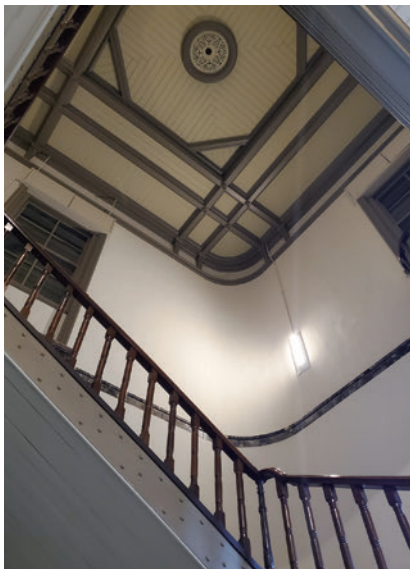
北海道経済・金融の中心として大いに繁栄していたことを実感でき、当時に思いをはせることができます。

業務展示ゾーンでは、日本銀行の各種業務についてのパネル紹介に加えて、支店営業当時に使用されていた金庫の内部が公開されています。金庫入り口の厚い扉を間近に見ることができるほか、一億円の銀行券の重さを体験するコーナーもあって、人気の撮影スポットになっています。

このほか、銀行券が印刷を終えた裁断前の大判の状態で展示されています。これは、非常に珍しく、当金融資料館の目玉の一つです。

展示に関しては、常設展示のほかに、毎年異なるテーマでの特別展を開催しています。当金融資料館としては、ご来館いただく皆さまに、普段あまり金融に馴染（なじ）みがなくてもご満足いただけるよう、力を入れて取り組んでいます。

現在、開館二〇周年特別展示「日本銀行のある街並み　小樽支店と銀行街」を開催しています。この特別展では、旧小樽支店や銀行街の古い写真等を通じて当時の雰囲気を感じ取っていただきたいと思っています。



内装にも当時のさまざまな技巧が凝らされている。

上段左：幾何学的な模様が施された歴史展示ゾーン（旧営業場）の板張り天井。
上段中央：優雅な曲線の装飾が施された回廊を支える金具。
上段右：階段室天井の木組み。
右：正面玄関内側に設けられた風除室（冬季の風雪を室内へ流入させないための小部屋）。

いつまでも親しみを持っていただくための取り組み

金融資料館がいつまでも親しんでいただけるものとなるよう、館内には職員が常駐して、運営実務を行っています。

展示エリアでは、ご来館いただいた皆さまからの質問などにお答えするほか、定期的にガイドツアーを開催するなど、初めていらした方も充実した見学時間を過ごしていただけるようサポートしています。ご来館いただいた皆さまから寄せられるさまざまなご質問に適切にお答えし、理解を深めていただけるよう、職員間で最新情報を共

来館者へのガイドツアーの様子。

有することなどに努めています。

このほか、地域の重要な観光資源としての役割を意識して、観光情報誌を作成する出版社などからの要望に応じて当金融資料館関連情報の提供を行うほか、テレビやラジオの番組取材にも対応しています。また、地元行政機関や観光関連団体と協力した観光イベントへの参加などにも取り組んでいます。

建物の管理も大事な役割です。金融資料館の建物は、歴史的価値の高さから小樽市指定有形文化財に指定されており、築一一〇年を超える歴史的建物を使用しながら保存・維持するために、きめ細かな施設管理を行っています。身近な例では、窓ガラスに使われている手吹きガラスは、今となっては代替品の入手ができないため、破損防止フィルムを張って保護し、異常が見られないか日頃の点検が欠かせません。このほかにも、米国製シャッターなど建築時に海外から輸入された部材がそのまま使われている箇所については、細心の注意を払いながら使用しています。そのうえで、施設の維持・管理や時代の変化に合わせた対応として必要がある場合には、当金融資料館を管理する日本銀行札幌支店や本店が補修工事等を実施しています。これまでも、経年劣化が見られた外壁の補修や空調機器の更新を行うなど、より安心・安全に、そして快適に見学時間を過ごしていただくための取り組みを行ってきました。バリアフリー対応については、二〇〇三年の開館当初から車いす用スロープの設置などを図っているほか、最近では正面玄関に点字ブロックを設置するなど障がいをお持ちの方が不安なくご来館いただけるよう取り組みを続けています。

二〇二〇年から続いた新型コロナウイルス感染症の影響で、当金融資料館は二〇二〇年から二〇二一年にかけて断続的に臨時閉館を余儀なくされ、来館者数は大幅に落ち込みましたが、最近になって徐々に回復し、週末にはコロナ禍以前の賑わいを取り戻しつつあります。

当金融資料館では、これからも、築一一〇年を超えた歴史的建物を大切に維持・管理するとともに、ご来館いただく皆さまの安心・安全に配慮しながら、親しまれる広報施設として歩んでいきたいと考えています。

当金融資料館は、入館無料、原則、予約不要でお越しいただけます。開館日は、毎週水曜日を除く毎日ですので、ぜひ足をお運びください。

【入館料】無料
【休館日】水曜日（ただし、祝日の場合は開館）
【開館時間】四月～十一月　九時三十分～十七時、十二月～三月　十時～十七時（入館は通年で十六時半まで）

最新の情報は金融資料館ＨＰをご覧ください。

【住所】北海道小樽市色内一―一―一六
【電話】〇一三四―二一―一一一一

明治時代に造られた平面ガラス越しに見た外の風景。円筒形に吹き膨らましたガラスを切り開き、板状にして造っていたため表面が滑らかではなく、道路標識の支柱（写真中央）が波打って見える。

日本銀行のレポートから

日本銀行は、金融システムの安定性を評価するとともに、安定確保に向けた課題について関係者とのコミュニケーションを深めることを目的として、金融システムレポートを年２回公表しています。本レポートの分析結果は、日本銀行の金融システムの安定確保のための施策立案や、考査・モニタリング等を通じた金融機関への指導・助言に活用しています。また、国際的な規制・監督・脆弱性評価に関する議論にも役立てています。金融政策運営面でも、マクロ的な金融システムの安定性評価を、中長期的な視点も含めた経済・物価動向のリスク評価を行ううえで重要な要素の一つとしています。

＊全文は日本銀行ホームページに掲載されています。https://www.boj.or.jp/research/brp/fsr/index.htm

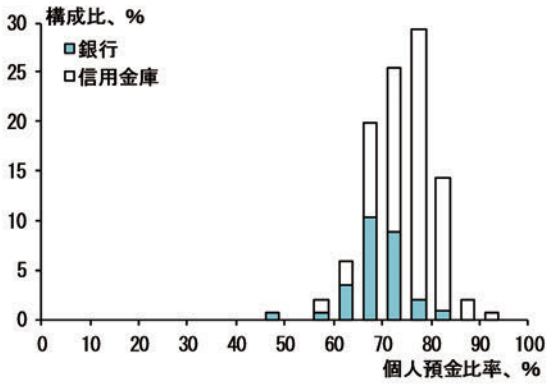
「金融システムレポート」

―二〇二三年四月―

わが国の金融システムは、全体として安定性を維持していると評価できる。世界的な金融環境の引き締まりとそれに起因する様々なストレスのもとでも、わが国の金融機関は、適切な金融仲介機能を発揮し得る充実した資本基盤を有している。流動性についても、小口の粘着的な個人預金を中心とした、安定的な資金調達基盤を有している（図表１、２）。今年三月の米銀破綻をきっかけに米欧の金融部門を巡る不確実性が高まったもとでも、わが国の金融システムは健全かつ頑健である。

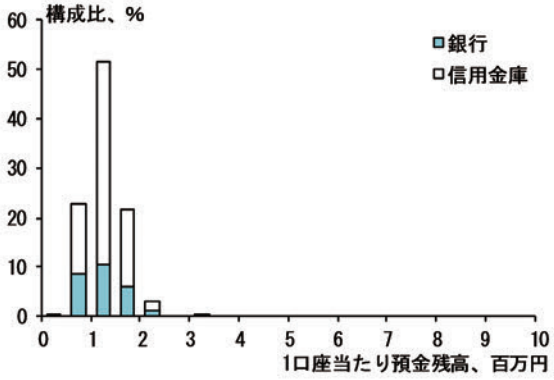
もっとも、テールリスクへの警戒は引き続き重要である。金融資本市場が神経質な展開となるなど、先行き不透明感の高い状況が続いてい

図表１　個人預金比率の分布



（注）金融機関全体（大手行・地域銀行・信用金庫）に対する構成比。「金融システムレポート（2023年４月号）全文」図表 B1-6 参照。
（資料）日本銀行

図表２　１口座当たり預金残高の分布



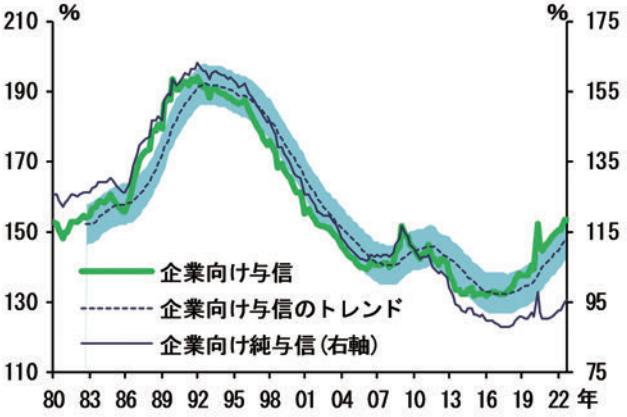
（注）金融機関全体（大手行・地域銀行・信用金庫）に対する構成比。「金融システムレポート（2023年４月号）全文」図表 B1-7 参照。
（資料）日本銀行

る。金融機関の内外貸出債権は、全体として高い質を維持しているものの、信用リスクの高い貸出もみられる。また、より長期的な視点からみると、金融機関の基礎的な収益力の低迷が続き、自己資本の蓄積が滞ることがあれば、損失吸収力の低下を通じて金融仲介活動が停滞する可能性や、過度な利回り追求を通じて金融システム面の脆弱性が高まる可能性がある。わが国金融システムの安定性を将来にわたって確保していく観点からは、こうした金融システムの停滞・過熱両方向のリスクを点検しつつ、潜在的な脆弱性に的確に対処する必要がある。

金融循環の現状

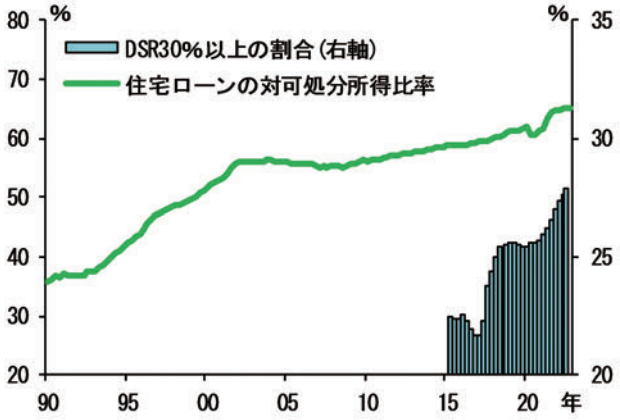
金融循環の拡張局面は、民間債務の増加を主因に長期化しているものの、現在の金融活動に大きな不均衡は認められない。民間債務増加の一因である企業向け与信の拡大には、手元資金を厚めに確保しようとする、中小企業を中心とした慎重な資金繰りが反映されている（図表３）。企業向け与信が拡大した反面、企業向け純与信（企業向け与信－企業の現預金）がほとんど拡大していないことから示唆されるように、中小企業の多くは、借入資金を手元資金として確保した状態が続いている。

図表３　企業向け与信の対ＧＤＰ比率



（注）「金融システムレポート（2023 年４月号）全文」
図表Ⅲ-3-3 参照。
（資料）内閣府、日本銀行

図表４　家計の住宅ローン



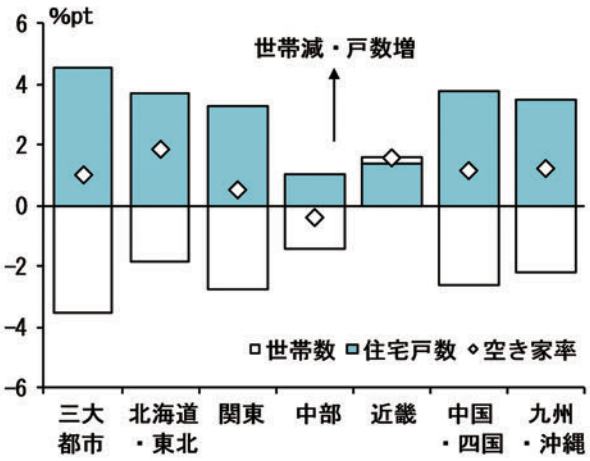
（注）「金融システムレポート（2023 年４月号）全文」
図表Ⅲ-3-7、Ⅲ-3-10 参照。
（資料）内閣府、日本銀行

ただし、増加した民間債務の中には、債務返済能力が相対的に低い債務者も一部みられる。マクロのＬＴＩ（貸出残高の対所得比率）に相当する「家計債務の対可処分所得比率」は、既往ピークを更新するなど上昇が続いている（図表４）。その過程では、ＤＳＲ（年間返済額の対年収比率）の高い住宅ローン構成比が上昇している。また、不動産業向け貸出は、全国各地で空き家率が高まるなかでも増加している（図表５）。空き家率の上昇は、借家世帯が減少した地域だけでなく、増加した地域においても観察される（図表６）。こうした民間債務の動向には引き続き注意が必要である。

国内企業のデフォルトと手元資金

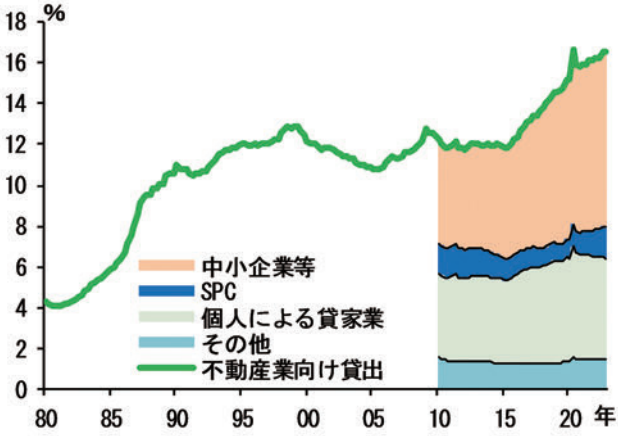
これまでのところ、企業のデフォルトは低位に抑制されている（図表７）。最近のデフォルト動向は、手元資金の多寡に規定されるところが大きい。この点、利益率の低い企業

図表６　空き家率の増減要因



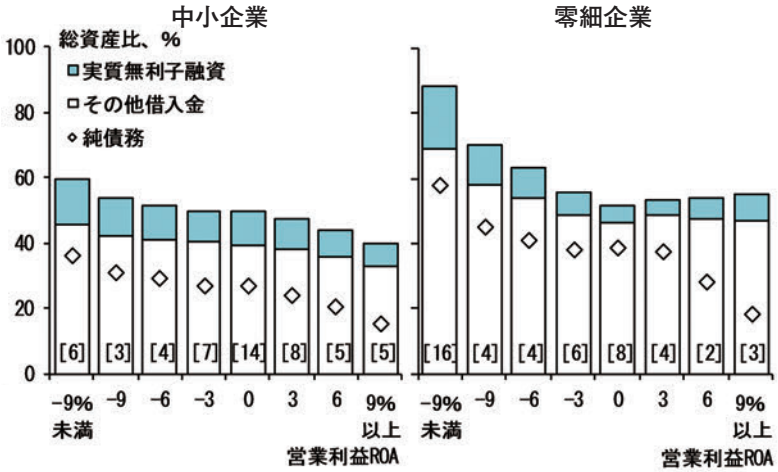
（注）空き家率の変化（2013～2018年）を借家世帯数と賃貸用住宅戸数の寄与に分解して表示。「金融システムレポート（2023年４月号）全文」図表Ⅲ-3-22参照。
（資料）総務省

図表５　不動産業向け貸出の対ＧＤＰ比率



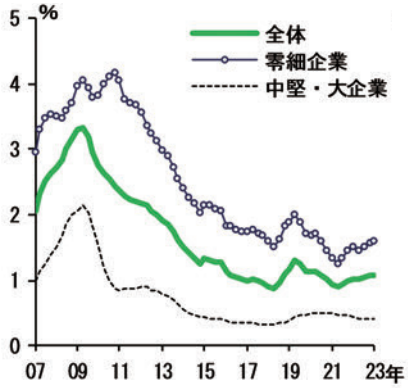
（注）「金融システムレポート（2023年４月号）全文」図表Ⅲ-3-14参照。
（資料）内閣府、日本銀行

図表８　企業の金融負債



（注）[ ]内は中小・零細企業の社数構成比。「金融システムレポート（2023年４月号）全文」図表Ⅳ-1-8参照。
（資料）CRD協会

図表７　企業規模別のデフォルト率

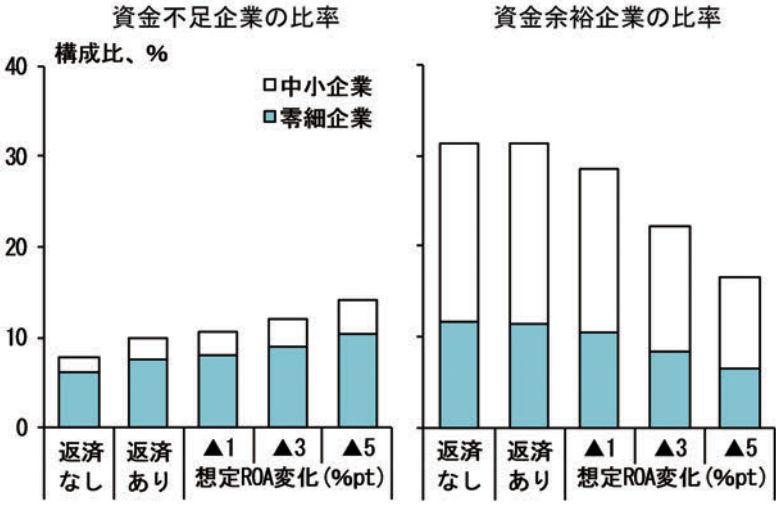


（注）「金融システムレポート（2023年４月号）全文」図表Ⅳ-1-7参照。
（資料）日本リスク・データ・バンク

ほど、総資産対比で借入債務が大きく、現預金などの手元資金が乏しくなっている（図表８）。特に零細企業は、グロスとネットの両面で財務レバレッジ（借入金／総資産）が高く、相対的に財務が脆弱である。実際、デフォルト率を企業規模別にみると、規模の小さい企業は緩やかに上昇し始めている。

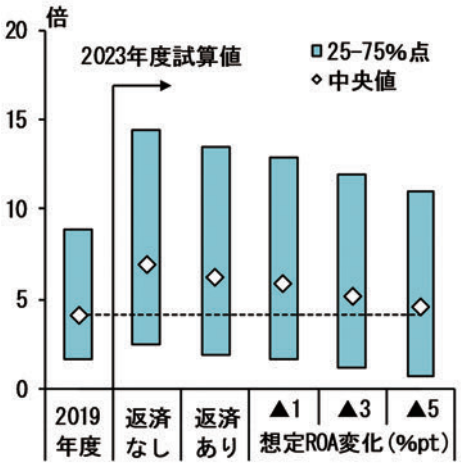
今後、実質無利子融資の元利返済が本格化すると、企業の債務コストが増加する。その影響を試算したところ、実質無利子融資の元利返済を勘案した場合（次ページ図表９中の「返済あり」）でも、半数以上の企業が、感染症拡大以前の二〇一九年度と同等か、それ以上の手元資金を確保できている（次ページ図表９）。ただし、手元資金が不足する企業群もある（次ページ図表10左図）。同企業のデフォルトリスクは、零細企業との取引の多い金融機関に集中し得る。他方、実質無利子融資を一括返済しても、高い手元資金比率を維持できる企業群もある（次ページ図表10右図）。実質無利子融資を繰上返

図表10　企業財務分布のテール



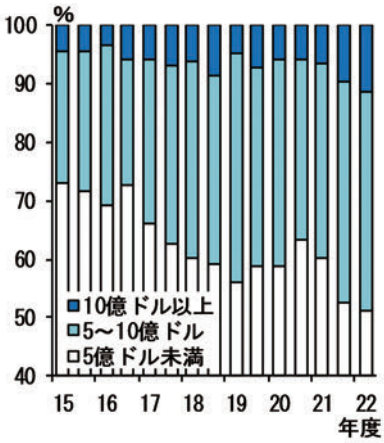
（注）「金融システムレポート（2023年4月号）全文」図表Ⅳ-1-12参照。
（資料）CRD協会

図表9　手元資金比率の分布



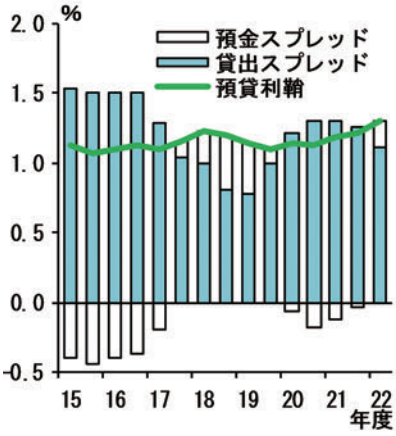
（注）対象は零細企業。「金融システムレポート（2023年4月号）全文」図表Ⅳ-1-11参照。
（資料）CRD協会

図表13　大口貸出の金額構成



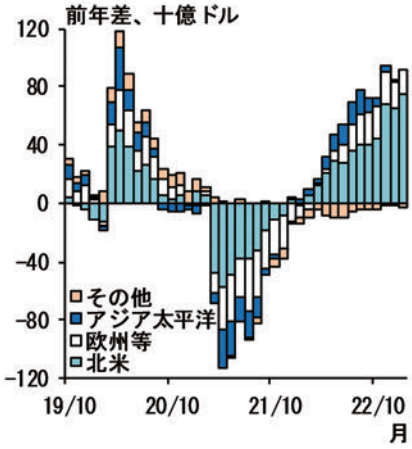
（注）「金融システムレポート（2023年4月号）全文」図表Ⅳ-2-5参照。
（資料）日本銀行

図表12　海外預貸利鞘



（注）「金融システムレポート（2023年4月号）全文」図表Ⅳ-2-3参照。
（資料）FRB、日本銀行

図表11　地域別の海外貸出



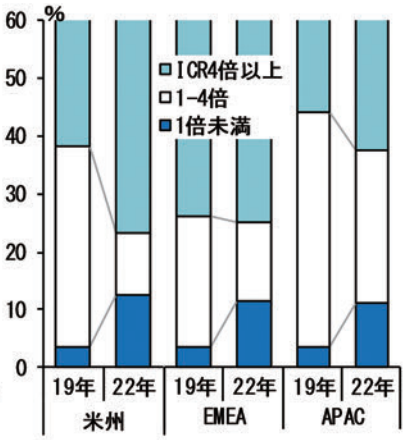
（注）「金融システムレポート（2023年4月号）全文」図表Ⅲ-1-14参照。
（資料）日本銀行

済する企業が多くなった場合、企業向け貸出と法人預金が同時に減少することになる。

海外貸出のリスクプロファイルの変化

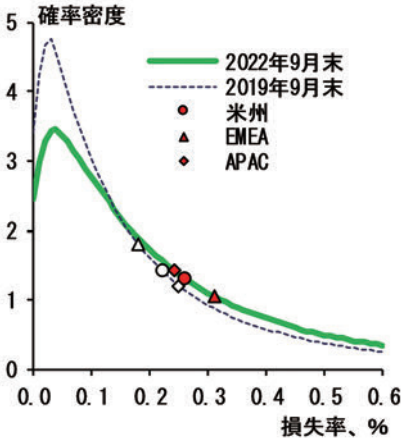
海外貸出の信用リスクは、世界的に引き締まった金融環境の中でも低位に抑制されている。もっとも、そのリスクプロファイルには変化もみられる。第一に、貸出構成がリスク抑制的な方向に変化している。地域別にみると、大手行は、米欧を中心とした資金需要に積極的に応需する一方、中国不動産市場の動向などが懸念されるアジア太平洋に対する貸出には抑制的になっている（図表11）。第二に、市場金利の上昇に連れて、預貸利鞘（りざや）が幾分改善している（図表12）。預貸利鞘の改善は、大手行の損失吸収力の改善にもつながっている。第三に、貸出の大口化と集中が一部で進んでい

図表16　大口貸出のＩＣＲ構成



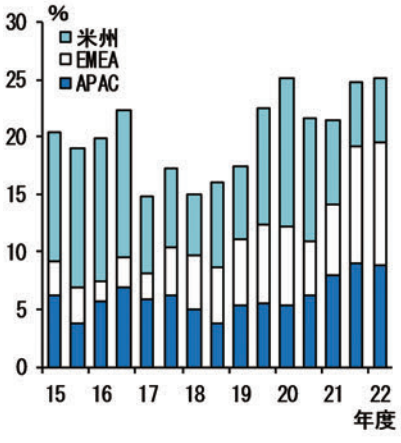
（注）「金融システムレポート（2023年４月号）全文」図表Ⅳ-２-12参照。
（資料）S&P Global Market Intelligence、日本銀行

図表15　大口貸出の期待損失



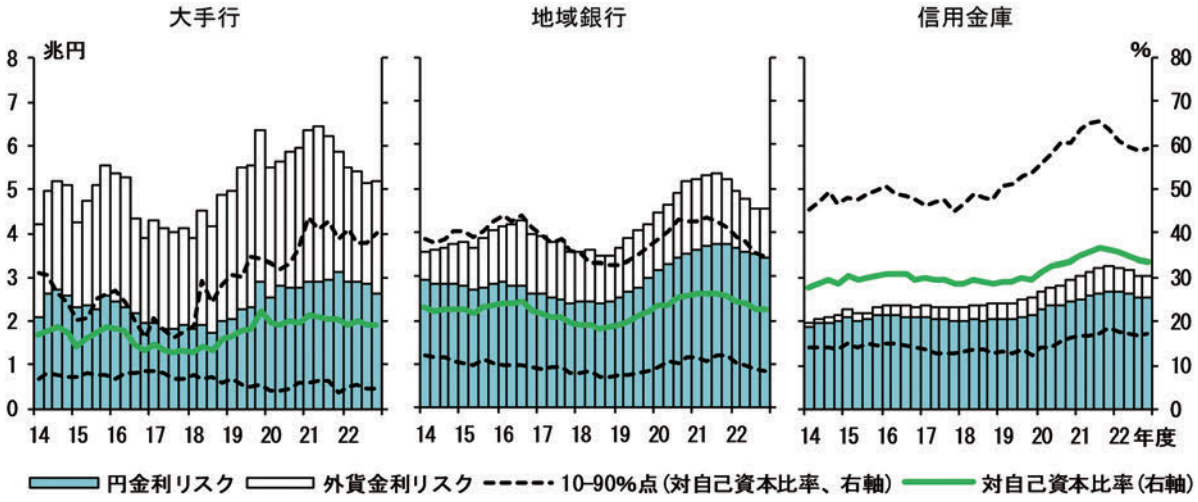
（注）「金融システムレポート（2023年４月号）全文」図表Ⅳ-２-11参照。
（資料）Moody's、The Global Credit Data Consortium「LGD Report 2020: Large Corporate Borrowers」、日本銀行

図表14　大口貸出の重複度



（注）３メガ行全てに共通する大口貸出先向けの貸出残高割合。「金融システムレポート（2023年４月号）全文」図表Ⅳ-２-６参照。
（資料）日本銀行

図表17　有価証券の金利リスク量



（注）「円金利リスク」は100bpv、「外貨金利リスク」は200bpv。外貨金利リスクはオフバランス取引を考慮。「金融システムレポート（2023年４月号）全文」図表Ⅳ-３-２参照。
（資料）日本銀行

る。貸出先の資金需要に積極的に応需してきたことが、趨勢的な貸出大口化の背景にある（図表13）。また、大手行間で貸出先が重複する案件が欧州等（ＥＭＥＡ）やアジア太平洋（ＡＰＡＣ）で増えており、大手行の海外貸出ポートフォリオはショックに対して連関しやすくなっている（図表14）。

こうした海外大口貸出の信用リスクは、大口化の進展もあって、ひと頃に比べて高まっている（図表15）。貸出先全体としてみると、堅調な売上を背景に、資金調達コストが上昇したもとでも利払い能力（ＩＣＲ）の悪化は免れているが、ＩＣＲ一倍未満の企業――本業利益だけでは利払い負担をカバーできない企業――をみると、その割合が上昇している（図表16）。今後、海外経済が大きく減速し、企業収益を下押しすることになれば、ＩＣＲの悪化は避けられない。大手行の大口貸出先は、

財務レバレッジが相対的に高い先でもあり、デフォルト確率の上昇につながりやすいと考えられる。

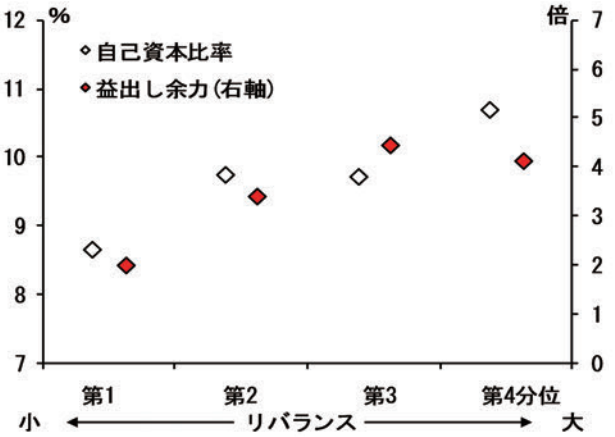
海外金利上昇に対する金融機関のストレス耐性

金融機関の有価証券投資にかかる外貨金利リスク量は、金利上昇が意識されるなか、大手行だけでなく、地域金融機関においても、減少傾向が鮮明になっている（前ページ図表17）。円貨金利リスク量も、これまでの増加トレンドから減少に転じている。海外金利が大きく逆イールド化した状態が続くことを想定したマクロ・ストレステストの結果からも、金融機関のバランスシート変化が、金利上昇リスクに対するストレス耐性の改善に寄与していることが確認される。

もっとも、金融機関ごとにみると、外貨金利リスク量やその背景にあるリバランス行動のばらつきが大きくなっている。大きくリバランスした銀行は、もともと損失吸収力が高かった先である（図表18）。また、リバランス行動の違いによって、リスクプロファイルの変化も様々である（図表19）。大きくリバランスした銀行（図表18、19中の第三、第四分位）では、外貨金利リスクを売却損として確定したことで、有価証券利回りが改善し、逆鞘（ぎゃくさや）リスクが抑制されている。このうち、損失確定売りに合わせて益出しも行った銀行では評価益（益出し余力）が減少し、削減したポジションを復元しなかった銀行（例えば、第四分位の銀行）では収益機会が損なわれたものの、評価損リスクは軽減されている。この間、ポジションを維持した銀行（図表18、19中の第一、第二分位）の中には、金利上昇リスクが逆鞘や評価損として顕在化している先もみられる。評価損の拡大は、実現損と同様に、配賦資本や分配可能額の減少を通じて、銀行財務に影響を及ぼすことに注意が必要である。

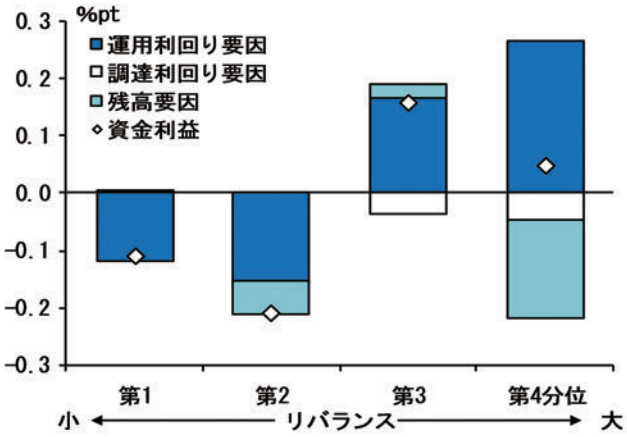
日本銀行は、考査・モニタリング等を通じて、これらの潜在的な脆弱性に対する金融機関の取り組みを後押しするとともに、マクロプルーデンスの視点から、金融機関による多様なリスクテイクが金融システムに及ぼす影響について引き続き注視していく。

図表18　損失吸収力の分布



（注）リバランス度合の分位ごとに、自己資本比率と益出し余力の中央値を表示。「金融システムレポート（2023年4月号）全文」図表Ⅳ-3-4参照。
（資料）日本銀行

図表19　有証関連資金利益の変化



（注）リバランス度合の分位ごとに、2022年中の資金利益（外貨建て外債と投資信託）変化と寄与度（対自己資本比率）の中央値を表示。「金融システムレポート（2023年4月号）全文」図表Ⅳ-3-7参照。
（資料）日本銀行

日本銀行新総裁、新副総裁就任

▼日本銀行の総裁および副総裁が交替しましたので、新しい総裁および副総裁をご紹介いたします。

【総裁】
植田和男

［うえだ・かずお］
昭和26年9月20日生
出身地　静岡県

昭和 49. 3　東京大学理学部卒業
　　49. 4　東京大学経済学部入学
　　50. 4　東京大学経済学部大学院入学
　　51. 9　マサチューセッツ工科大学経済学部大学院入学
　　55. 5　マサチューセッツ工科大学経済学部大学院卒業（55. 9 Ph.D. 取得）
　　55. 7　ブリティッシュ・コロンビア大学経済学部助教授
　　57. 4　大阪大学経済学部助教授
平成 元. 4　東京大学経済学部助教授
　　5. 3　東京大学経済学部教授
　　10. 4　日本銀行政策委員会審議委員
　　12. 4　日本銀行政策委員会審議委員（再任）
　　17. 4　日本銀行政策委員会審議委員退任
　　17. 4　東京大学大学院経済学研究科教授
　　29. 4　共立女子大学教授
令和　5. 4　日本銀行総裁

【副総裁】
内田眞一

［うちだ・しんいち］
昭和37年8月22日生
出身地　東京都

昭和 61. 3　東京大学法学部卒業
　　61. 4　日本銀行入行
平成 19. 5　企画局参事役
　　20. 7　総務人事局参事役
　　22. 7　新潟支店長
　　24. 5　企画局長
　　29. 3　名古屋支店長
　　30. 4　日本銀行理事
令和　4. 4　日本銀行理事（再任）
　　5. 3　日本銀行副総裁

【副総裁】
氷見野良三

［ひみの・りょうぞう］
昭和35年4月25日生
出身地　富山県

昭和 58. 3　東京大学法学部卒業
　　58. 4　大蔵省入省
平成 15.10　バーゼル銀行監督委員会事務局長
　　18. 7　金融庁監督局証券課長
　　19. 7　金融庁監督局銀行第一課長
　　21. 7　金融庁監督局総務課長
　　22. 7　金融庁総務企画局参事官
　　24. 7　金融庁総務企画局審議官
　　28. 7　金融庁金融国際審議官
令和　2. 7　金融庁長官
　　3. 9　東京大学公共政策大学院客員教授
　　4. 1　（株）ニッセイ基礎研究所総合政策研究部エグゼクティブ・フェロー
　　5. 3　日本銀行副総裁

貨幣博物館 来館者数二〇〇万人達成

▼日本銀行金融研究所貨幣博物館は、一九八五年十一月の開館以来の来館者数が、三月十四日に二〇〇万人を達成しました。これを記念して、二〇〇万人目にご来館された方々を囲んでセレモニーを執り行いました。

▼貨幣博物館は、一時は感染症の影響により臨時休館を余儀

200万人目にご来館された方々

なくされた時期もありましたが、このところ、学生のグループやご家族連れのご来館も増え、活気を取り戻しています。今後も、より魅力的な博物館を目指し、展示や各種情報発信の充実に努めてまいります。

▼皆さま方のご厚誼（こうぎ）に心より感謝しつつ、より多くの方々のご来館をお待ちしております。

※開館日等の情報は貨幣博物館ホームページをご覧ください。

第二三回情報セキュリティ・シンポジウムをオンライン開催

▼金融研究所情報技術研究センター（CITECS）は、二〇二三年三月三日、「オープン・ソース・ソフトウェア（OSS）のセキュリティ」をテーマとするシンポジウムを開催しました。参加者は、金融機関の関係者やシステム開発事業者などを中心に約一五〇名に上り、この問題への関心の高まりが伺われました。

▼OSSは、ソースコードが公開され、誰もが自由に利用や修正、再配布が可能なソフトウェアで、ソフトウェア開発において不可欠な社会インフラとなっています。今回のシンポジウムでは、こうしたOSSを金融業界において安全に活用していくことを展望し、OSSが想定している開発の世界観、脆弱（ぜいじゃく）性対応の難点や対応策、金融業界における取り組み、機械学習に特有の新たなリスクといったテーマについて、三名の外部有識者に講演を行っていただきました。パネル・ディスカッションでは、金融機関におけるOSSコミュニティとの関わり方や、業界横断的な共助の考え方とその限界などについて議論が交わされました。

▼その模様や講演資料を日本銀行金融研究所ホームページに掲載しておりますので、ご覧ください。

国際コンファランスを開催

▼一九八三年以来、日本銀行は、金融研究所において国内外の著名な経済学者や中央銀行関係者を招いた国際コンファランスを開催しています。今年は、「Old and New Challenges for Monetary Policy」（金融政策の古典的な課題と新たな展望）をテーマとして、五月三十一日、六月一日に開催しました（四年ぶりの対面形式）。

▼植田和男総裁の開会挨拶、カリフォルニア大学バークレー校のモーリス・オブストフェルド教授による前川講演（金融研究所発足時〈一九八二年〉の前川春雄総裁の名を冠したスピーチ）に続き、インフレ予想の形成メカニズムや政策議事録のテキスト解析に関する研究発表やパネル討議が行われ、金融政策の課題や展望について議論が展開されました。

開会挨拶を行う植田和男総裁（撮影：中島美沙）

「ISOパネル（第七回）：生体認証技術の金融サービスへの活用 ―新しい国際標準ISO19092の概要と活用可能性―」を開催（三月）

▼決済機構局では、三月六日に標記パネルディスカッションをオンラインで開催しました。

▼スマートフォンを活用したオンラインでの本人確認（eKYC（イーケーワイシー））など、金融サービスにおいても生体認証技術の活用が進んできています。このため、国際標準化機構（ISO）は、技術の進展等を捉え、リテール決済

に焦点を当てた生体認証システムのモデルやそのセキュリティ要件に関する規格ISO19092を刷新し、三月に公表しました。

▼当日は、まず、この新しい標準規格での仕様と、関連する生体認証に関するISO規格を簡単に解説しました。そして、ISO以外の生体認証に関する規格のうち、業界で広く認知されているFIDO（ファイド）の規格についても簡単に解説しました。その後、生体認証に携わる専門家の方々と、①生体認証技術の金融サービスへの活用事例、および、②今後の生体認証技術の金融サービスへの活用の展望と国際標準の活用についてパネルディスカッション形式で議論しました。

▼決済機構局は、金融サービス分野の国際標準化を検討する国際標準化機構（ISO）・金融サービス専門委員会（TC68）の国内委員会事務局を務めています。金融サービス分野の標準化に関心のある方は、日本銀行ホームページに活動内容や取り組みを掲載しておりますので、ご覧ください。

「決済の未来フォーラム クロスボーダー送金分科会（第五回）」を開催（三月）

▼決済機構局では、三月十六日に標記会合を開催しました。

▼会合では、まずクロスボーダー送金の改善に向けたG20のロードマップの優先アクションが紹介されました。参加者からは、AML／CFT（注）の効率化・高度化に資する取り組みを支持する声が聞かれました。

▼次に、ISO20022の採用に関する取り組みとして、送金電文の仕様にかかる共通要件の策定に向けた国際的な動向が紹介されました。参加者からは、クロスボーダー送金のコストやスピードを改善するためには、各国の送金実務等の透明性確保と併せて作業を進めるべきとの意見が聞かれました。

▼最後に、日本のAML／CFTの現状が紹介され、金融機関が求められる対応や立法措置および業界横断の取り組みに関して、幅広い意見が寄せられました。

（注）マネーロンダリングおよびテロ資金供与対策を指す。

中央銀行デジタル通貨に関する実証実験（パイロット実験）を開始

▼日本銀行は、二〇二一年四月より、中央銀行デジタル通貨（CBDC）に関する実証実験を進めています。このうち、CBDCの基本的な機能や具備すべき特性が技術的に可能か否かを検証するプロセスである「概念実証」は二〇二三年三月に終了し、同年四月より「パイロット実験」を開始しました。

▼「パイロット実験」では、中央システムのみならず、仲介機関ネットワークや仲介機関システム、ネットワークの末端機器も含む実験用システムを構築し、業務フローの確認や外部システムとの接続に向けた課題・対応策の検討等を行います。

▼また、CBDCの設計を適切に進める観点から「CBDCフォーラム」を設置し、リテール決済に関わる民間事業者にご参加いただいた上で、幅広いテーマについて議論・検討を行っていきます。

▼この間、「中央銀行デジタル通貨に関する連絡協議会」では、実証実験の内容や進捗（しんちょく）状況等について、民間事業者や関係当局の方々と情報共有や意見交換を行ってきています。二月十七日に開催した五回目の連絡協議会では、「パイロット実験」の進め方について説明するとともに、CBDCに関する海外主要国の取り組み等について、参加者の方々と意見交換を行いました。

▼「パイロット実験」の概要や連絡協議会の説明資料等は、日本銀行ホームページに掲載しておりますので、ご覧ください。

「第一九回日銀グランプリ～キャンパスからの提言～」論文募集中

応募締切：九月三十日（土）

▼「日銀グランプリ」は、学生の皆さんを対象に開催する、金融・経済分野の小論文・プレゼンテーションコンテストです。

二〇〇五年度から毎年開催しており、今年度も応募論文を募集中です。

▼テーマは「わが国の金融・経済への提言」です。応募に当たっては、日本銀行ホームページ上の募集要項をお読みください。多くの学生の皆さんからの提言をお待ちしております。

「日銀春休み親子見学会」を開催

▼日本銀行本店では、三月二十九日、三十日に、小学校四年生～中学校三年生の児童・生徒およびその保護者の方を対象とした「日銀春休み親子見学会二〇二三」を開催しました。

▼見学会では、本館見学やお札に関する体験学習などのプログラムにご参加いただきました。参加者からは「普段は気付かない偽造防止技術を学ぶことができて、興味深く、面白かった」などの感想が寄せられました。

▼次回の開催は夏休み期間中を予定しています。

編集後記

■対談では、日本サッカー協会会長の田嶋幸三氏と高田創審議委員にお話しいただきました。W杯での日本代表の活躍の裏には、長年にわたる地道な指導者育成の取り組みなどがあったことを熱く語っていただいています。グローバル化がもっとも進んだスポーツとも言えるサッカー界の取り組みは、わが国が将来目指すべき方向性を考える上でも示唆に富んでいるように感じました。

■インタビューでは、俳優とショートフィルム映画祭の主宰という２つの世界で活躍されている別所哲也氏を取材しました。中でも日本でショートフィルムの映画祭を立ち上げられた経緯は驚きの展開が多くお勧めです。別所氏の行動力の高さに感服するとともに、夢に共感し協力してくれた仲間の方々をとても大切にしておられたことが強く印象に残りました。

■地域の底力では、香川県三豊市を取り上げました。新たに地域に加わった方々の力をうまく融合しつつ、一人ひとりが誇りを持てる社会を目指しておられます。三豊市の方々の寛容さが潤滑油となって、良い循環が生まれているようです。（上口）

［アンケート募集中］

「にちぎん」に関するご意見・ご感想は、アンケートよりお寄せください。
日本銀行のホームページからもご回答いただけます。

※本誌は、全国の日本銀行本支店および貨幣博物館、旧小樽支店金融資料館等でお配りしています。個人の方の定期購読、郵送はお取り扱いしておりませんのでご了承ください。なお、既刊号全文をPDF ファイル形式で日本銀行ホームページ上に掲載していますのでご利用ください。（https://www.boj.or.jp/about/koho_nichigin/index.htm）

※本誌に掲載している内容は、必ずしも日本銀行の見解を反映しているものではありません。日本銀行の政策・業務運営に関する公式見解等については、日本銀行ホームページ（https://www.boj.or.jp）をご覧ください。

にちぎん　2023 年夏号
編集・発行人　高口博英
発行　日本銀行情報サービス局
〒103-8660
東京都中央区日本橋本石町 2-1-1
☎ 03-3277-1609

デザイン　株式会社市川事務所
印 刷　株式会社アイネット
禁無断転載

from Frankfurt

欧州統合の象徴「ユーロ」

EU加盟国の国旗と各国言語で書かれた「欧州中央銀行」の文字

2023年初め、クロアチアが統合通貨「ユーロ」を導入し、EUのユーロ導入国は20カ国となりました。この通貨ユーロは、紙幣・硬貨の正式な流通開始（2002年）から約20年（注1）、その発行額は紙幣だけで約200兆円（注2）、銀行預金等も含めれば約2,000兆円 にも上り、ユーロ導入国に住む3億人を超える住民や、その地域を訪れる観光客などさまざまな人々の活動を支えています。

この比較的新しいながらも巨大なユーロですが、慣れ親しんだ通貨からの切り替えには相応の違和感が伴ったようです。EUの世論調査によると、「ユーロを持つことが自国にとって良いこと（Good thing）か」という質問に対する回答は、2007年時点でもGood thing：45%、Bad thing：42%と拮抗（きっこう）していました。また、一部メディアのユーロ20周年回顧記事によると、導入前後の当時は多くの人が、ユーロはそもそも実現しない、すぐに崩壊するなどと予想していたようです。

しかし現在では多くの人が知るように、ユーロは幅広く浸透しました。2022年の世論調査では、「ユーロを持つことがEUにとって良いことか」、また「自国にとって良いことか」という質問に対し、それぞれ77%、69%の人々がGood thingと回答しています（注3）。先ほどの2007年の回答とも見比べると、時間をかけて通貨統合のメリットが理解されていった様子がうかがわれます。

近年、コロナ禍はもとより、ウクライナにおける戦争や高インフレ、エネルギー供給問題など多くの難題に直面する欧州ではありますが、「ユーロは欧州の強さと統合の象徴」とクロアチアのユーロ導入に際してフォン・デア・ライエン欧州委員長が述べたように、ユーロは引き続きその役割と機能を発揮することが期待されています。

（欧州中央銀行、フランクフルト）

（注1）通貨単位としてのユーロは1999年1月に導入されていますが、当初は紙幣・硬貨の存在しない電子的決済通貨でした。
（注2）2022年末レート（1ユーロ約140円）にて換算。
（注3）“Bad thing”はそれぞれ15%、22%（残りは無回答、どちらともいえない等）。

＊本コーナーは海外で働く日本銀行職員または日本銀行からの出向者が執筆しています。

多くの観光客が訪れるクロアチア・ドゥブロヴニクの旧港

ユーロ導入を間近に控える中、現地通貨（クーナ）建て価格とユーロ建て価格が併記されている店舗看板

にちぎん　第一九巻　第二号　通巻七四号　令和五年六月二十六日発行

にちぎん

ISSN 1880-0327